日本財団支援活動の報告

2019年
台風
被災地を
歩く。

日本財団
THE NIPPON FOUNDATION
For Social Innovation

KATO

はじめに

災害のない年がないと言えるほど、毎年のように日本各地で自然災害が繰り返されています。地震、津波、噴火、豪雨、暴風、豪雪……。地球上で見れば、ごく小さな島にしか過ぎない日本はこの１０年だけでも、多岐にわたる被災を経験し、「災害列島」という言葉も耳にします。

２０１９年は台風の年でした。２０年２月になって、気象庁は９月の台風１５号を「令和元年房総半島台風」、１０月の１９号を「令和元年東日本台風」と名付けました。台風に名前がつくのは１９７７年の沖永良部台風以来、４３年ぶりです。後世に教訓を伝えることが目的ですが、それだけ大きな被害だったと言えます。

台風１５号は強風の被害が特徴でした。９月９日早朝に神奈川県の三浦半島付近を通過した後、千葉市付近に上陸しました。総務省消防庁のまとめでは、災害関連死を含めると千葉県で２人、東京都で１人が亡くなりました。千葉県南部では大規模な停電も発生しました。

１９号は大雨を各地に降らせました。１０月１２日夜、非常に強い勢力のまま伊豆半島地方に上陸した後、関東地方を通過。１３日未明に東北地方から海上に抜けました。関東甲信地方で記録的な雨となり、１２～１３日にかけて１３都県で大雨特別警報が発表されました。消防庁によると、１０月２５～２６日の大雨を含めると全国で死者９９人、行方不明３人にのぼりました。都道府県別では福島県が最も多く３２人。次いで宮城県１９人、千葉県１２人でした。

その災害から数カ月になりますが、復旧の途上にある被災地もあります。日本財団は発生以来、被災地の支援活動やボランティアに取り組む民間の団体などに財政面の援助を行ってきました。また、被災した学校や幼稚園といった教育機関については、教材の購入などで直接支援をしました。いずれも被災した方々が日常を取り戻し、安心した生活を送ってほしいという思いからです。

また、その財源としては、とても多くの方からの寄付を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

２月、復旧・復興に向けた活動が続く現場を歩き、その現状をまとめました。私たちは被災地が一日も早く元の暮らしに戻ることを願っております。

次々に襲った大雨・台風は、
各地に甚大な被害を
もたらしました。

CONTENTS

令和元年8月の
前線に伴う大雨
8/27

[佐賀県]
武雄市―― 全ては被災者の笑顔のため。 ―― 4

台風15号
9/9上陸

[千葉県]
鋸南町―― 屋根飛ばすほどの強風、爪痕いまも。 ―― 8
鋸南町―― 閉じる花農家、学生がボランティア。 ―― 11
鋸南町―― 被災住宅のカビ、ボランティアが除去。 ―― 14
木更津市― ブルーシート張りを自衛隊に伝授。 ―― 15

台風19号
10/12上陸

[長野県]
長野市―― 堤防決壊、えぐられた壁。求められる支援。 ―― 16
長野市―― 泥水が襲ったリンゴ産地、収穫まで続く支援。 ―― 21
小布施町― ボランティア向けに重機講習。 ―― 26
長野市―― 被災した受験生の勉強、高校生たちが支援。 ―― 29
長野市―― 泥の下に見えた希望、高校生がボランティア。 ―― 32
長野市―― 浸水した高校、体育館も道具も被害。 ―― 37

[宮城県]
丸森町―― 町中心部も被災、続く不便な生活。 ―― 40
丸森町―― 半世帯が被災した地域で生活支援。 ―― 45
丸森町―― 町長に聞く、災害への対応後手に課題。 ―― 48
丸森町―― 家の自力再建を豊富な経験で支える。 ―― 51
丸森町―― 埋もれた神社をNPOと住民が再生。 ―― 54
丸森町―― 被災者寄り添い、支援続ける萬ちゃん。 ―― 57

[福島県]
福島県―― 水に浸かった学校、授業や部活動に影響。 ―― 62
いわき市 ― コメ農家を学生ボランティアが支援。 ―― 66
郡山市―― 障害者の生活再建を家電で支援。 ―― 70
いわき市 ― 被災者を元気に、公民館でサロン。 ―― 72

[栃木県] [茨城県]
栃木県―― 豪雨で車水没、カーシェアで足を確保。 ―― 75
茨城県―― 被災者の心身、鍼灸師のマッサージでケア。 ―― 77

資料　支出明細―― 78

現地レポート

佐賀県武雄市

全ては被災者の笑顔のため。

2019年9月に佐賀県で行われた「災害時における小型重機の講習会」で、
消防士たちに小型重機の扱いについて講習する黒澤さん。

地震、台風、津波、土砂災害…。日本は世界の中でも自然災害の多い国のひとつである。日本列島は４つのプレートにより形成されているため地震・火山活動が活発だ。また、アジアモンスーン地域と呼ばれる気候帯にあるため梅雨や台風の影響をまともに受けやすく、短く急な河川は上流から下流へ一気に水が流れるためいったん雨が降ると急に増水しやすい。近年では温暖化の影響か、災害の頻度と深刻さは、増しつつある。

被災者の「助けて」という声に応える。黒澤さんが現場主義を貫く理由。

「災害現場とは、特殊なものです。普段生活していて、見知らぬ人から『助けてもらえませんか？』と声を掛けられることなんて、なかなかないですよね。被災地では、それが普通に起こります。屋根の上に車が乗っていたり、歩道が崩れたりすることもしばしば。これまでの常識が通じない世界なのです」国や自治体が何でも助けてくれると思っている人もいるかもしれないが、それは大きな間違いだと黒澤さんは指摘する。

「例えば、川が溢れてあなたの家の玄関前に水上バイクが流れ着いたとします。国や自治体は、誰の持ち物か分からないものは撤去できません。また、道路の整備などを行うにしても、国や自治体の場合は、調査会社にリサーチを依頼し、業者に見積もりを出してもらい、ゼネコンに頼んで発注しないといけません。カバーできる規模は大きいのですが、どうしても時間がかかってしまうのが国や自治体の支援なのです」

被災地を飛び回る中、今回のインタビューに応じてくれた黒澤さん。

災害発生時は、消防団やレスキュー隊も大きな現場から対処せざるを得ない。そんなときに、「助けて」という個人の声に応えられるのが民間のボランティアなのだ。

「もちろん人命が第一優先ですが、ほかにも大切なものはたくさんあります。土砂崩れや水害などでめちゃくちゃになってしまった現場を、少しでももとに近い状態に戻すことも非常に重要です。誰でも家の前に車や船が転がっている状況が何日も続くのは耐えられませんよね。どうしても災害のことを思い出してしまうし、ずっと避難生活を強いられることになってしまい、精神的な影響も甚大です」

黒澤さんと一緒にボランティア活動を行った消防士の天野（あまの）さんは、「ボランティアの現場で黒澤さんに小型重機の使い方を知らないと話したら、その場で講習会を提案いただき、開催につながりました。年々、大きな災害が増えているので、小型重機を扱えるようになって、もっと迅速に救助活動が行えるようになれればと思っています」と、意気込みを語る。

2019年8月の佐賀豪雨後の光景。
一夜にして、街や畑が茶色の湖に変わってしまった。

インタビューに応える久保田さん。

班の全員が操作を終えると、大きさが異なる小型ショベルカーを使って同じことを繰り返す。操作にも次第に慣れてくると、黒澤さんから新たな試練が。おもむろに近くにあった石やペットボトルを小型ショベルカーのバケットに置き、それを落としたり、倒したりしないようにと指示が与えられた。参加者たちは「難しい」と呟きながらも、時折笑顔を見せながらミッションに取り組む。

「ナイスユンボ！」などと声を掛け合い、互いに励まし合いながら小型ショベルカーを操作する
消防職員の皆さん。写真左側が天野さん。

地域で小型重機を扱える人材が育てば、より災害に強い街づくりにつながる。

「小型重機を動かすのは難しい半面、とても楽しい作業でした。仕事やボランティアで災害現場に行く機会は多いのですが、常に小型重機の重要性を感じます。ガレキが散乱する道路に消防車やレスキュー車を通すためにも重機は必要になりますし、土砂などに埋もれた家を掘り起こしたりするのも重機があれば効率良く進められます」そう語るのは、武雄市の消防局を勤める永石（ながいし）さん。佐賀豪雨での体験を通して、災害現場における小型重機の必要性をより強く実感したと語る。

小型重機があれば助かる命は増える
と話す永石さん。

「普段は消防局で働いていますが、黒澤さんとはボランティアの現場で何度かお会いしています。現場では、消防の持つスキルを生かす方法を教えてくれ、被災者が今の現状を乗り越え笑顔になれるよう尽力している姿には、いつも感銘を受けます。これまで培った技術を無償で提供してくれることには感謝しかないですし、重機という新しい選択肢を与えてくれたことも本当にありがたいです。今日習ったことを消防全体にアウトプットしていきたいですね」

いつ起こるか分からない大規模災害。発生時にすぐに駆けつけられる小型重機を扱える人材がいるということは、どれほど心強いことだろう。災害が起こる前に地域で小型重機を扱える人材を育てておくことが、迅速で効率的な救援につながり、より災害に強い街づくりにつながるのではないだろうか。

豪雨により冠水した
佐賀県武雄市の様子。

現地レポート

千葉県鋸南町

屋根飛ばすほどの強風、爪痕いまも。

鋸南町では家屋だけではなく、町役場も台風15号で被災しました。

2019年9月、観測史上最強クラスとされる台風15号が千葉県を襲いました。猛烈な暴風は民家の屋根や瓦を吹き飛ばしました。そして、飛ばされた屋根などが、さらにほかの民家に被害を与える結果に。県内の家屋被害は、全壊や半壊、一部損壊をあわせると約6万棟に及んでいます。

なかでも千葉県南部では9月9日未明、最大瞬間風速48.8メートルを記録。走行中のトラックが横転するほどの強い風が鋸南町や館山市、南房総市などの海沿いの都市に被害をもたらしました。

それから5カ月となる2月上旬。被災した自治体のひとつ、鋸南町をたずねました。人口約8000人、約3000世帯の同町で、家屋被害は3000棟以上に及びました。被災当時、何があったのでしょうか。そして今、復旧・復興はどこまで進んでいるのでしょうか。町でその中心を担っている職員に話を聞きました。

町役場、窓ガラス割れ天井崩落。

「毎年台風は来ていましたが、去年ほどの台風は初めて。建物の屋根が飛ばされたり、壁が破れたりしているのを見て、町全体がまるで空襲を受けたかようでした」鋸南町役場の復興支援室長を務める小川亮一さんはそう台風15号を振り返ります。

被災当時を振り返る鋸南町の小川亮一復興支援室長。

役場の全職員約100人に招集がかかったのは、最大瞬間風速を記録した約3時間後の9日午前6時でした。あくまで自主的なものでしたが、多くの職員が集まって被災状況の確認や被災者の対応にあたりました。

ただ、鋸南町役場の庁舎も被災しました。窓ガラスが割れ、そこから流れ込んだ暴風の影響で天井が崩落。避難所にする予定だった学校なども窓ガラスが割れる被害に遭い、開設できない状態になっていました。

当時、保健福祉課の福祉支援室長だった小川さんは、9日午前6時過ぎに出勤後、14日まで連日泊まり込みで作業に対応にあたりました。ほかの多くの職員も、被害確認や孤立世帯のケア、ブルーシートや食料などの配布といった初動対応に追われました。

家屋にブルーシート、進まぬ修繕。

台風の爪痕はいまも深く残っています。町を見渡すと、依然として屋根にブルーシートをはった家屋が目立ちます。なぜ5カ月が経った今でも、屋根の修理が進まないのでしょうか。

鋸南町内にはいまもブルーシートをはる家屋が目立ちます。

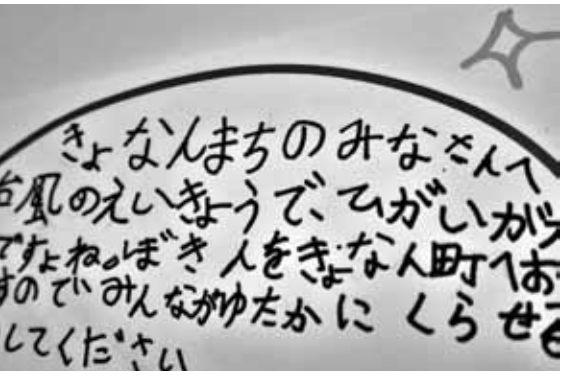
小川さんはその理由をこう語ります。「町では高齢化と人口減少が進んでいます。新築住宅も年間を通して多くありません。だから町内の瓦屋、大工といった職人の数も減っていました。そんなときの被災で修理の需要が急増し、修理が追いつかなくなりました。町内の職人だけでは2～3軒ずつしか対応できません。依頼をしても、数カ月先まで予約が埋まっている状況でした」

では、ほかの自治体や他県の業者に発注することは難しいのでしょうか。

「地域性かもしれませんが、鋸南町では代々同じ業者に頼む、という方が多いです。ほかの業者に頼むのは不義理になるという考え方があるのではないでしょうか。それに加えて、瓦や屋根の修理費の相場がわからないため、知らない業者に頼むことに不安もあるのだと思います」

また、国や県、町から被災住宅に補助金は出るものの、それだけではすべてを修理することはできません。小川さんは「もともとお金に余裕がある人は補償が充実している保険に入っていることが多いです。一方で余裕のない人は保険に入っていないこともあります。たとえば、80歳を超えた年金暮らしではローンもなかなか組めないため、ずっとブルーシートをはったままになってしまいます。災害によって、格差がさらに広がってしまうこともあります」と話します。

子どもたちからの言葉、励みに前進。



目黒区の幼稚園から義援金とともに町役場に届いたノートには園児たちのメッセージが書き込まれていました。

台風15号の被災以降、鋸南町を含めた千葉県の被災地には全国から多くの義援金が届きました。鋸南町には約8500万円が届き、被災者支援にあてられています。そのなかには、東京の小学生からの義援金もありました。小川さんは「義援金も大変ありがたかったですが、それ以上に子供たちの気持ちがうれしかったです」と話します。その理由は、義援金とともに学童保育施設から送られた1冊のノートでした。

「元気をとりもどしてがんばってください」「台風や大雨、だいじょうぶでしたか?」「みんながゆたかにくらせるようにしてください」そのノートには小学生たちからの手書きのメッセージがびっしりと書かれていました。小川さんにとって、そのノートは「宝物」。被災から5カ月が経ち、復興はまだ途上です。そんなときにこのノートが心の励ましになっています。

現地レポート

千葉県鋸南町

閉じる花農家、学生がボランティア。

ガラスがあったはずの屋根からは青空が見えていました。2019年9月の台風15号で被災した鋸南町。毎年美しいカーネーションを育てていたガラスハウスで、大学生が黙々と作業にあたっていました。

被災したガラスハウスで
撤去作業にあたる大学生。

鋸南町は激しい暴雨風に見舞われた結果、多くの家屋や建物が壊れ、町内の農業用ハウスの損壊は167棟に及びました。さらに10月の台風19号も追い打ちをかけました。

被災した農家を支援しようと、日本財団学生ボランティアセンター（通称：Gakuvo）が参加者を募ったところ、2月5日の活動に明治大学のボランティアサークルが手を上げ、21人が現地に入りました。

この日の現場は川崎周治さん（72）と妻礼子さん（70）の畑。2人は40年以上にわたりカーネーションを栽培してきた農家でした。丹精込めて育てたカーネーションは東京などの卸売市場に毎年4万本ほど出荷され、「青山フラワーマーケット」といった有名花屋にも並んでいました。

台風でハウス損壊、再開を断念

しかし、昨年の台風でカーネーションを屋内栽培するガラスハウスが全壊。修復に数千万円の費用がかかることや高齢であることを考えて、川崎さん夫妻はカーネーション栽培をやめることを決めました。

川崎さんが栽培していたカーネーションは20種類以上におよぶ。

カーネーション畑には、常に畑を湿らせておく水源を確保するために、コンクリート板とそれを支える鉄の杭が埋まっていました。栽培をやめたことにより、それらを取り除いて畑を更地に戻す必要がありました。そこで、学生たちがその作業を担うことになりました。カーネーション畑だった300平方メートルあまりの土地は平らに整えられていきました。

畑の整備「学生が助けてくれた」

「被災して困っている人のためにボランティア活動に来ているのに、活動をしている自分たちのほうが元気をもらっています」。ボランティアに参加した明治大学1年の駒井一斗さん(19)はそう話します。鋸南町でのボランティア活動は初めてですが、昨年の台風被害では、茨城県大子町でも、浸水被害にあった家屋の掃除などのボランティア活動に参加しました。

畑に埋まったコンクリート板を取り除く大学生。

駒井さんは復興に大事なのは、「何度も人が訪れること」と感じているそうです。その理由を「何度も人が集まれば、被災状況が多くの人にも伝わり、風化しにくくなります。人と人との交流にもつながると思います」と話しました。

学生たちの活動を受けて礼子さんは「畑の整備は家屋ではないから、どうしても後回しになりがちな作業でした。学生の皆さんのボランティア活動はすごく助かりました」と目を細めていました。

ブルーシート、とれない家屋多数。

川崎さん夫妻の自宅も被災し、ブルーシートがはられていた。

一方で、被災から5カ月経った2月時点でも、屋根にブルーシートをはった家屋が目立ちます。

今回の活動にスタッフとして同行したピースボート災害支援センターの関根正孝さん(38)は、鋸南町の現状を「被災者は今、生活はできますが、被災前の水準には戻っていません。屋根がブルーシートのため、雨漏りをしてカビが生えるといった潜在的な困りごとは多いはずです。継続的な支援が必要と思っています」と話しました。

現地レポート

千葉県鋸南町

被災住宅のカビ、ボランティアが除去。

2019年9月に千葉県南部を襲った台風15号から数カ月になりますが、被災した住宅の復旧作業は続いています。「Kissin'heart東北」は台風15号の発生直後から千葉県鋸南町などで、被災住宅の補修や清掃をするボランティア活動に取り組みました。

雨漏りの影響で、鋸南町の住宅の天井には黒カビが繁殖しました。
そのカビを丁寧に清掃する「Kissin'heart東北」のメンバー。

鋸南町の家屋でカビの清掃にあたる「Kissin'heart東北」のメンバー。

台風被害を受けた住宅の復旧に向けた課題になっているのが、室内に発生するカビです。被災した住宅は、猛烈な風で屋根が吹き飛ばされたり、飛来物で損壊したりしました。屋根を補修する前に雨漏りしてしまった住宅も多く、住宅内の木材が水分を含んでしまう被害が多く発生しました。

気づきにくい住宅内の繁殖。

その結果、天井や壁にカビが繁殖し、被災した住宅内の衛生環境が悪化しました。住宅を外から見るとカビが見えない場合もありますが、住宅内に入ると壁や天井にカビが生え、独特の悪臭がするそうです。「Kissin'heart東北」はそうした住宅内のカビ清掃のボランティア活動を進めています。

カビの清掃作業は、エタノールなどで拭き取った後に、殺菌消毒剤を散布するという、除カビと防カビの両方の作業が必要です。橋本欣明代表は「屋根の修繕に時間がかかるように、カビの除去も一軒ずつ時間がかかります」と話します。1日がかりの作業のため、ボランティアの人手も十分ではありません。

また、橋本さんは「足が不自由なひとり暮らしの高齢者は、2階建ての一軒家に住んでいてもほとんど2階に行きません。このため、2階の天井や壁にカビが生えても気づかなかったり、我慢したりして暮らす人が多いです」と話します。そこに今後の課題があると橋本さんは考えます。「梅雨の季節になれば、放置されてきたカビがさらに繁殖する可能性があります。可能な限り対応していきたいです」と話し、これからも活動を続けていく考えです。

現地レポート

千葉県木更津市

ブルーシート張りを自衛隊に伝授。

ブルーシートの張り方のポイントを聞く自衛隊員。

千葉県南部は台風15号の強風による大きな被害を受けました。屋根が壊れた家屋が多く、屋根にブルーシートを張る作業のニーズが多く生じました。

しかし、ブルーシート張りは難易度が高く、危険が伴います。このため、需要があっても、実際に作業ができる人が少ない状態でした。

そこで、木更津市社会福祉協議会が災害ボランティア「愛・知・人」にブルーシート張りの講習会を依頼しました。2019年10月16日には、「愛・知・人」の塩竹正徳さんが講師を務め、木更津市内で自衛隊員にブルーシート張りを伝授しました。

ブルーシート張りを学んだのは、下志津駐屯地（千葉市若葉区）の自衛隊員25人。これまでのボランティア活動では、屋根全面にブルーシートをかけて、それを土のうで押さえるだけだったそうです。ただ、それではブルーシートがすぐはがれてしまうなど強度の面で不安要素がありました。

そこで、塩竹さんたち愛・知・人のメンバーが、張ったブルーシートを長持ちさせる方法をレクチャーしました。屋根に張るブルーシートや、支えるための土のう袋の品質を確認し、丈夫なものをそろえる必要があることなども説明。屋根に登る前には、簡易型の屋根の模型を使いながら、張り方のコツを教えました。

被災した民家の屋根でブルーシート張りをする自衛隊員。
（写真２点共：災害ボランティア「愛・知・人」提供）

講習後は、早速被災した木更津市内の民家に出向き、ブルーシート張りの活動を始めました。愛・知・人と自衛隊とで複数の班に分かれ、ブルーシートを張り直す作業などをしました。愛・知・人の赤池博美代表は「いろいろな場所で活動する自衛隊員の方たちでも屋根の上でのブルーシート張りは知識がないとできません。ただ、最初の一歩を超えればスムーズにできると思っています。自衛隊の皆さんは上達も早く、助かりました」と話しました。

現地レポート

長野市

堤防決壊、えぐられた壁。求められる支援。

被災した長沼体育館。
4カ月前の被害の大きさを
物語っています。

体育館の隣にあった消防団の詰め所も被災しました。

2月上旬、リンゴ畑が周囲に広がる長野市。この壊れた長沼体育館のそばを流れる千曲川の堤防が決壊したのは、4カ月前のことでした。時間が止まったような光景に息をのみました。川の方向を見ると、堤防の復旧工事にあたるショベルが動き、土ぼこりの舞う中をダンプカーが行き交っていました。

2019年10月の台風19号は、上陸前から最大級の警戒が呼びかけられました。それでも災害は起きました。「山に守られたような地域で、台風の被害に遭うとは思いませんでした」。取材で出会った人の多くがそう語ったのが、長野の被災地でした。

豪雨、2日で年間降雨の3分の1。

台風19号の特徴は大雨でした。上陸する前から活発に雨雲が生じたことで、広範囲にわたって強い雨が降り続けました。降った雨は山地に大量の水をもたらし、雨が流れ込んだ川は中流に行くにつれてどんどん水かさを増します。北アルプスや関東山地の水を集め、やがて信濃川となって日本海に注ぐ千曲川もそのひとつでした。

千曲川の堤防の決壊現場では、
復旧工事が続いています。
奥に見えるのは被災後に設置した仮堤防。

国土交通省のまとめでは、千曲川流域の東側で特に多くの雨が降りました。内陸性の盆地であるこの地域は本来雨が少なく、長野市の年間降水量は900ミリ程度。一方で、10月12日午前1時から2日間で降った雨量は北相木村で395ミリ、軽井沢町で324ミリを観測。つまり、年間降水量の3分の1に相当する雨が非常に短期間で降ったのでした。

耐えきれなかった堤防。

大量の水が流れ込んだ千曲川。長野市穂保では約70メートルにわたり堤防が決壊しました。さらに1.5キロにわたって、水位が堤防の高さを上回る「越水」も起きました。国によって仮堤防という応急処置がされていますが、本復旧に向けた工事が進むのはこれからです。

水害は長野市だけでなく、千曲市や佐久市など、広範囲に及びました。1月末までの県のまとめでは、県内では5人が亡くなり、145人がけがをしました。住宅被害は全壊916棟、半壊2496棟を含む8302棟に及びました。被害総額は2714億円で、農地など農業関係の被害だけで668億円に達しています。

堤防の決壊現場を望む位置にあった
古い神社は、建物の跡形もなく、
小さな祠だけが置かれていました

長沼体育館の隣には、市の長沼支所もありました。一帯では住宅や畑、道路を含めて約930ヘクタールもの広大な面積が浸水し、水位が約2メートルに及んだ場所もあります。支所の建物も損壊し、近くにあった古い神社の建物は跡形もなく、小さな祠だけが置かれていました。

続くボランティア活動。

長沼体育館前にある支援活動の拠点。
隣は日本財団が被災地に寄贈した軽トラック。

その支所と体育館の前に「日本財団災害救援」と掲げられたプレハブ小屋が建っていました。災害NGO結（ゆい）や地元で立ち上がった復興支援グループが拠点にしています。夕方に訪れると、その日の活動を報告し合うミーティングが開かれていました。

今は別の場所に避難して生活をしているものの、落ち着かないので壊れていない部分などを使いたいと考えている人がいる、という報告がありました。結の前原土武（とむ）代表（41）は「今はまだ寒いが、温かい季節になると、自宅に戻りたいと考える人が出てきます。そのときの支援も必要になります」とニーズに応じた活動の必要性を指摘します。

長沼体育館の内部の様子。床は壊れたままになっていました。

「経験積んだ専門家が必要」

前原さんの名刺には「ボランティア」の文字はなく、「災害支援活動家」「災害復旧・復興支援コーディネーター」と書いてあります。前原さんは自身を災害支援の専門家であると考えているからです。

災害NGO結の前原土武代表

東日本大震災以来、毎年全国の被災地を訪れています。結はいち早く災害現場に駆けつけて現場を走り回る緊急的な支援活動を重視しています。今回も被災の直後に長野に入りました。

これまでに約6万人を超えるボランティアが長野で活動をしました。前原さんは「山やスノーボードなどで長野を訪れたことがあって、『自分ごと』として考えられた人が多かったと思います。さらに交通の便が良く、多くの人が集まりやすかったと言えます」と見ています。

ただ、参加者が増えれば、それを調整する役目も必要になります。だからこそ、前原さんは1～2カ月という「長期戦」で活動する人も必要と考えています。「調整があるから明日の活動ができます。人間関係があるからニーズが届く」と話し、一定期間にわたり被災地に入る専門家の必要性を訴えます。「知識や経験を積み重ねた専門家がもっと増えないといけません。同時に資金面での支えも必要です」と語りました。

堤防の決壊現場では、本復旧に向けた工事が進められていました

現地レポート

長野市

泥水が襲ったリンゴ産地、収穫まで続く支援。

台風19号が長野の被災地に与えたのは人的被害だけではありません。千曲川の堤防が決壊した場所のある長沼地区は特産のリンゴの生産地。川に並行して走る国道は「アップルライン」と呼ばれていました。しかも、台風が直撃したのは、まさに収穫を迎える実りの秋のことでした。リンゴ農家にとっては、家だけでなくその後の生活の糧も被災したのです。

出荷できなかったリンゴを手にする徳永さん。リンゴ箱が残されていました。

リンゴ農家の徳永慎吾さん（39）も被災したひとりです。2階建て住宅の1階部分は床上浸水。2階部分しか使えなくなり、1.5ヘクタールの果樹園は泥水に覆われました。台風が伊豆半島から関東地方にかけて上陸した10月12日夜、徳永さんは家族と避難所にいました。

「なんとか水が引いて、家の近くに帰ることができたのは14日夕方。最初は最悪2階もだめだな、と思いました。畑の様子は見ただけで、まずは家の片付けが先でした」

水を引いてから初めて自宅に戻ったときの様子。（10月14日、徳永さん提供）

冷蔵庫が倒れた台所の様子。（10月15日、徳永さん提供）

リンゴの木は高さが数メートルあり、一見、水を被らなかったリンゴは出荷できるように思います。しかし、泥水につかったリンゴはもちろん、雑菌がついた可能性があれば、出荷はできません。早期に育つ品種で収穫していたものを除き、大切に育ててきたリンゴの出荷が難しくなってしまいました。

被災した徳永さんのリンゴ畑。（10月24日、徳永さん提供）

樹木の呼吸、妨げる泥。

水が引いた後は、地面に大量の泥が残りました。今年１月末時点の長野県のまとめでは、長野市を中心として869ヘクタールに厚さ５センチから最大60センチの土砂が畑や果樹園にたまりました。その総量は107万立方メートルにも及んだのです。

この泥が果樹園にとっては厄介で、樹木の呼吸を妨げてしまいます。さらに例年、春にはその年の栽培に向けた作業を本格的に始めなければならないのですが、泥が残っている状態では機械を使えず、作業が遅れてしまいます。「気持ちを切り替えていくしかないです。泥をかぶった樹木に花がさいて、実がなるのかはわかりませんが、実がつくことを想定して取り組んでいます」

徳永さんは地元の農家と「長沼林檎生産組合ぽんど童」をつくり、その組合長を務めています。自分たちの土地とは別に、遊休農地を利用して共同でリンゴを育て、産地を大事にしてきました。「ぽんど」は英語で「沼」。その名の通り、長い歴史をたどると水害が繰り返され、その結果として肥沃な土壌がはぐくまれ、おいしいリンゴが育つ地域でもありました。

農作業用の倉庫は片付けが
後回しになってしまったそうです。
（10月24日、徳永さん提供）

長期の付き合い、新たな関係に。

ただ、徳永さんを含むメンバーは自分たちの家と畑が被災し、ぽんど童の果樹園の復旧にはなかなか手が回りませんでした。そんなとき、東日本大震災などで支援活動をしてきた一般社団法人「LOVE FOR NIPPON」（東京都渋谷区）がボランティア作業として、ぽんど童の泥かきに手を上げました。

ぽんど童の畑には、訪れたボランティアの木札を掛ける看板があります。

「これだけ多くの人がこの地域に来てくれることはありませんでした。これを機にさらに長い付き合いになれば、新たな販路にもつながると思いました」。そう語る徳永さんたちを勇気づけたのはボランティアの存在でした。ぽんど童には昨秋から、多くの人が週末に合わせてボランティアに入りました。年が明けても活動は続きました。

一方でぽんど童の周囲には、泥かきがまだ終わっていない果樹園だけでなく、泥かきすらできていない場所もありました。県のまとめで明らかになった長野市内の土砂は、堤防より宅地側の農地では４割強が撤去されましたが、堤防より川側の農地ではまったく手つかずでした。収穫できずに地面に落とした多くのリンゴがそのままになっている果樹園も見かけました。

ぽんど童のリンゴ畑で被災の状況を説明する徳永さん。

災害が地域に大きな打撃を与えたことは事実です。それでも、徳永さんは多くの人が地域に関心を持ち、継続して訪れ続けることを願っています。「安心して住めないと感じている人もいますが、長沼というリンゴの産地としてこれからも生産を続けていきたいです」。

収穫して一緒に味わう、それが目標。

LOVE FOR NIPPONは「リンゴスタープロジェクト」と題した長野の被災地の支援活動に取り組んでいます。ぽんど童の畑には名前を書いた木札を掛けられる看板を置いています。一過性の活動とせず、今後も継続して現地を訪れる予定で、当面の目標は次の収穫である今年の秋に関わった人たちが集い、農家の人たちと一緒にリンゴを味わえることをめざしています。

2月15日に販売されたリンゴ箱を再利用した箱。

また、現地に行かなくても支援につなげられるようにと、プロジェクトに賛同したデザイナーがパーカーとTシャツを制作。インターネット上で購入できます。2月15日には、東京都内でイベントを開き、被災地の畑にあって処分に困っていた木製のリンゴ箱に手を加えて、3000円で販売しました。LOVE FOR NIPPONのCANDLE JUNE代表は「訪れた場所に足跡を残し、活動を続け、絆づくりをしていくことが大切です」と話しています。

LOVE FOR NIPPONのCANDLE JUNE代表

現地レポート

長野県小布施町

ボランティア向けに重機講習。

川の水があふれ、大量の泥が流れ込んだ被災地で、ニーズがあったのはショベルなどの重機でした。ただ、重機はあっても運転できる人が足りないという課題がありました。そこで、現場に入るボランティアでも重機を扱えるようにするための講習会が開かれました。

ショベルの講習を受ける参加者。

2月上旬、長野県小布施町。雪が舞う草地に小型ショベルが並んでいました。ヘルメット姿の男女21人が3人ずつ1組になり、穴の掘り方などを学ぶ講習を受けました。学科もあり、受講者は小型の重機を扱えるようになります。

主催したのは近くにある浄光寺住職の林映寿さん(43)。林さんは東日本大震災の後に「日本笑顔プロジェクト」と名付けた被災地支援をはじめ、被災した宮城県女川町などの支援に取り組みました。

ショベルの扱い方の説明を聞く参加者たち。

それだけに「自分が住んでいるところが被災地になるとは思わなかった」と話します。今回の千曲川の水害は、堤防が決壊した長野市の被害が注目されましたが、小布施町も被害を受けています。リンゴや特産の栗を含めた農産物の被害額は約1億4500万円にのぼりました。県によると、143ヘクタールの農地には約20万立方メートルの泥がたまってしまったのです。

栗畑にたまった泥の排土作業をボランティアが担いました。(2019年12月、小布施町、日本笑顔プロジェクト提供)

講習に115人、参加者手応え。

バギーカー運転の講師を自ら買って出た林さん。

林さんはなんとか農家の力になりたいと考えました。でも、泥をかき出したくても重機が足りない、さらに重機があっても動かせる人がいない、という事態に直面しました。重機を扱える人を増やす方が被災地のためになると考え、講習会を開くことにしたのです。2月までに6回を開くと、目標の100人を上回る115人が参加しました。

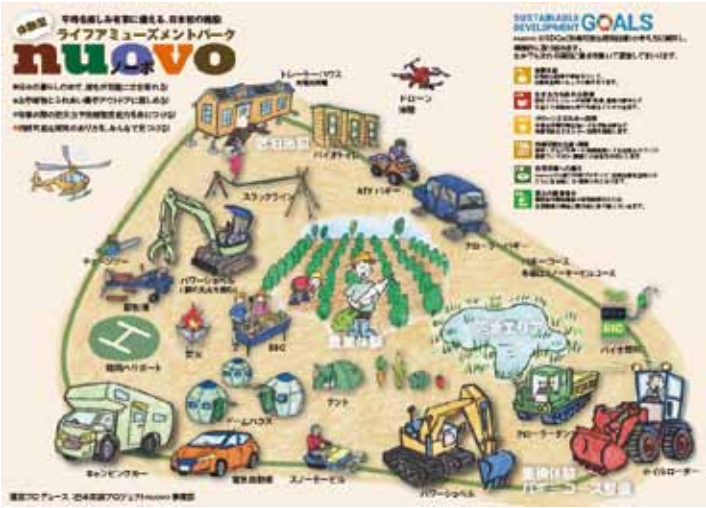
2月上旬の講習会では特別にバギーカーも用意しました。東日本大震災でガレキの中では車が役に立たなかったのを林さんは見ました。その後バギーカーを購入。普段は除雪に使っていましたが、今回の被災地では大活躍しました。水を含んだ泥の現場に消防車などが近づけない一方、バギーカーが威力を発揮したのです。

参加者に被災地の現状を説明する林さん。

長野県須坂市の篠塚明美さん（52）は仕事を休んで参加。「触るのも、乗るのも、動かすのも初めてでした。扱えるようになって、お手伝いができれば、と思いました。数をこなせば、自分でもできるような気がします」と手応えを感じた様子でした。

長野市の福島礼史さん（53）は「まだまだ畑の片付けが必要で、ボランティアでも重機のオペレーターができると聞いて参加しました。現場は変化していて、ニーズがどんどん掘り起こされていると思います」と話しました。

平時から次への備えを。



被災地の復興支援の経験から日本笑顔プロジェクトが考えた体験型アミューズメントパーク「nuovo（ノーボ）」の構想イメージ。（同プロジェクト提供）

林さんが今回の被災を通じて感じたのは、平時からいかに災害に備えるか、ということです。そこで、ふだんから重機の扱いを体験できる環境づくりを提案しています。「平時を楽しみ有事に備えることが大切です。被災した地域だからこそ、次への備えとして取り組んでいく必要があります」と語りました。

現地レポート

長野市

被災した受験生の勉強、高校生たちが支援。

台風19号が与えた被害は目に見える浸水だけではありません。長野市の被災地域で暮らす子供たちの日常にも影響を与えました。浸水した学校ではしばらく授業が再開できず、休校が10月末～11月に及んだ学校もありました。遅れを取り戻す手助けをしようと、勉強をサポートする取り組みがありました。

勉強のサポートを受ける中学生たち。

「ここをつなぐと、どうなるかな?」。電流計と電圧計のイラストを前に男子大学生が女子中学生に尋ねます。2月上旬の夜、長野市豊野の「まちの縁側　ぬくぬく亭」で、ジャージー姿の中学生2～3年生10人が机に向かっていました。ぬくぬく亭は12月に地域住民の交流や被災者支援の拠点として設けられたプレハブ施設です。

学校休校、勉強場所を確保。

JR豊野駅に近いこの地域も、川からあふれた水が押し寄せました。この日訪れていた生徒が通う豊野中学校は床上浸水の被害に見舞われました。別の学校の校舎を使って豊野中学校の３年生が授業を再開したのは10月末。全学年がそろった形での通常授業の再開は11月に入ってからでした。

年明けの受験を前にした３年生にとっては、この時期のブランクは精神的な不安にもつながります。落ち着いて勉強する場所を確保する必要がありました。

自習室で勉強に取り組む中学生たち。

そこで長野県NPOセンターが認定NPO法人カタリバとの共催で学習支援に乗り出すことになり、中学生向けの「自習室」をぬくぬく亭にオープンしました。１月から毎週火曜と木曜、希望する生徒が参加する形式で、午後５～９時という開設時間のために食事も用意しました。

取材した2月上旬、この日のメニューはカレーとサラダでした。自習室という位置づけですが、高校生や大学生、教員OBがボランティアでスタッフとして参加し、わからないところは丁寧に指導します。

数学のテキストを開いていた中３の男子生徒（15）は「災害が起きたときは『まさか』と驚きました。学校も使えなくなりました」と振り返ります。自習室を訪れるのは２回目で、「勉強を教えてもらえると聞いて、参加しました。ご飯も出してもらえるのでありがたいです」と話しました。

中学生に出す食事をつくるスタッフ。
（１月28日、県NPOセンター提供）

口コミで広がり、増えるニーズ。

教える側で参加していた長野市立長野高校２年の依田水希さん（１７）は災害前、これまで経験してきたボランティアでは「何の役に立っているのかがよくわからない」と感じることもありました。ただ、地元の災害に直面し、「自分に何かができるなら、現地に行きたい」と思うようになりました。そして、今回の活動を通じて、「誰かに何かを与えることで、自分も成長できる」と考えています。

自習室は初回の参加は２人でしたが、口コミによって訪れる生徒は徐々に増えました。県ＮＰＯセンターの小林達矢事務局次長は「直接被災したかどうかを問わず、子どもたちはショックは受けています。災害後にぼーっとしてしまい、志望校をあきらめるケースもあります」と話します。今回の取り組みは年度内までですが、「学習支援のニーズはあるので、今後のあり方は検討したい」と考えています。

駐車場を敷地として設けられたぬくぬく亭。
右は日本財団が被災地に寄贈した軽トラック。

現地レポート

長野市

泥の下に見えた希望、高校生がボランティア。

長野の被災地では多くのボランティアが活動し、高校生もその役割を担いました。地元で起きた大きな災害を目の当たりにした生徒たちが「少しでも役に立ちたい」と立ち上がりました。

被災した住宅の庭で泥出しをする高校生。（2019年11月9日、横沢祥子さん提供）

県立上田染谷丘高校（上田市）2年の金子芽衣（めい）さん（17）は2019年11月、長野市の被災した住宅の泥出しにあたりました。「思ったよりも泥がひどく、地面が見えませんでした。子供たちの鉛筆を見かけ、使っていたものが流された、と感じました」。泥は固くなっており、草も絡まっていました。スコップを持ち、ひたすら泥をかき出しました。

すると、ようやく地面にあったマットが見えたときです。「希望が見えた」。その家に住む男性が口を開きました。被災して先の見えない暮らしに気持ちが暗くなっていたのでしょうか。泥に隠れていた被災前の生活の一部が姿を見せたことで、男性に生きる希望をもたらしたのかもしれません。その言葉を聞いた金子さんは「やってよかった」とボランティアに強いやりがいを感じました。

側溝にたまった泥をかき出す高校生。
（12月14日、横沢さん提供）

被災した住宅の庭で掃除をする高校生。（12月14日、横沢さん提供）

被災した子どもたちの支えに。

３年生の設楽魅夢（みゆ）さん（18）は11 ～ 12月、被災した農家での作業や、被害の大きかった地域の子供たちの遊びを支援するボランティアに複数回足を運びました。公民館で開かれたクリスマス会では当初、子供たちが緊張している様子でした。

でも、ちょっと遊ぶとすぐに慣れ、「『楽しかった』と言ってくれてうれしかった」と感じました。また、遊び場がなくなった子どもたちにとって、高校生とかかわる機会は貴重でした。「『子供たちと一緒に体を動かしてくれてありがたい』と日頃のスタッフの方に言っていただき、お手伝いができたと思いました」と話しました。

被災地の子どもに
絵本の読み聞かせをする高校生。
（12月8日、横沢さん提供）

被災地の子どもたちと高校生が散歩に出かけました。（11月24日、横沢さん提供）

延べ300人が現地で活躍。

「何かをやろうとすぐに思いました」。上田染谷丘高校と県立上田東高校に勤務する横沢祥子教諭はそう振り返ります。県高校文化連盟ボランティア専門部の事務局長を務めており、両校などの生徒たちを集めて今回のボランティア活動を進めました。

被災地の畑で立ち往生した
トラックを助ける高校生。
（12月14日、横沢さん提供）

横沢さんは1995年に起きた阪神・淡路大震災から、災害時に生徒が参加するボランティアに取り組んできました。当時は文房具を送ることから始めました。東日本大震災のときは、同時期に起きた地震で被害の大きかった長野県北部の栄村に出向き、キャンプをしながら被災地を支える経験を生徒に積ませています。

今回の災害では2月までに、県内の高校11校から延べ約260人が被災地での泥出しやごみ運搬などのボランティアに参加しました。被災地の小学校や公民館を会場に、学習や遊びの支援をするボランティアには3校から延べ約30人が参加しています。

ボランティア活動をした金子さん（後列中央）ら、上田染谷丘高校2年生の皆さん。

孫のような世代、心の支援。

横沢さんは、ボランティアへの参加を通じて「生徒は自分の隠れていた部分に気づき、感性が磨かれる。『市民』として社会で生きて行くための人間総合力が向上する」と考えています。

年配の被災者との交流もポイントになります。今回はリンゴの産地を水害が襲いました。ボランティアで訪れた生徒たちに「リンゴを食べさせてあげられないことが悲しい」と複雑な心境を明かす人もいました。

横沢さんは「孫のような世代の高校生が入ると、被災者には喜ばれる。大人のボランティアには話ができなくても、高校生には感情を表すことができ、心の支援につながっていく。若い人がもっと多くボランティアに入ってほしい」と感じています。

ボランティア活動をした設楽さん（左）ら、
上田染谷丘高校３年生の皆さん。

現地レポート

長野市

浸水した高校、体育館も道具も被害。

長野県内は千曲川周辺で広範囲な水害があり、学校が相次いで被害を受けました。長野市の長野俊英高校も被害を受けた学校のひとつです。川からあふれた水は約１キロ離れた敷地に押し寄せました。

体育館も水浸しになりました。
（2019年10月13日、学校提供）

長野俊英高校は篠ノ井（しののい）地区にあります。この一帯は、川が堤防を越えて、約370ヘクタールが浸水しました。付近の水路からも水があふれ、被害は校内全体に及びました。校舎１階や体育館、グラウンドには泥も流れ込み、１週間にわたり休校となりました。

水に浸かった体育用具を新調。

「何から手をつけていいのか、どこに助けを求めればいいのか」。高校を運営する学校法人篠ノ井学園の職員中澤圭吾さん（31）は被災直後、頭を抱えました。グラウンドが一面泥水につかり、水が引いた後に消毒をする必要がありました。そこで地域の住民や生徒がグラウンドや駐車場に消石灰をまくボランティア作業を担い、なんとか１週間で授業の再開にこぎつけました。

玄関や駐車場も浸水。（10月13日、学校提供）

体育館では、フロアの床上浸水だけでなく、倉庫にあった体育道具が水浸しになりました。中澤さんは「卒業までの単位は決まっており、体育の授業として成り立たせるには道具が必要でした。屋内競技をするにしても、体育館が使えない状態になっていました」と説明します。

そこで日本財団の支援を受け、被災した体育道具を新たにそろえることにしました。マットやロイター板、ソフトボールに使うグローブ、サッカーボールなどを買いました。

コピー機のある部屋も水につかりました。
（10月13日、学校提供）

校舎1階の職員室も被災しました。（10月13日、学校提供）

反り返ったフロア、残った爪痕。

取材した2月上旬、真新しいマットが倉庫に置いてありました。「迅速な対応がとてもありがたかったです」と中澤さん。

消毒のための消石灰で、
雪のように白くなったグラウンド。
（10月19日、学校提供）

体育館では生徒が授業に臨んでいました。泥水につかったフロアの一部は反り返ったままで、年内には全面張り替えになるそうです。校内の廊下で床下が見えるふたを開けると、まだ水分を含んでいる地下の様子を確認できました。

「今回の台風で被害を受けることはノーマークでした。事前の情報に対して、もっと警戒をする必要があると思いました」。中澤さんは今回の災害をそう振り返りました。

被災後に新調したマット。

現地レポート

宮城県丸森町

町中心部も被災、続く不便な生活。

2019年10月12日の台風19号は宮城県に大きな被害をもたらしました。県内の家屋被害は、全壊304棟、半壊2974棟、一部破損2718棟に及びました。人的被害は7市町で19人が死亡し、2人が行方不明となりました。

このうち10人死亡、1人行方不明と、自治体単位では全国でも最多の犠牲者を出したのが丸森町です。住民はいまも仮設住宅で暮らすなど、不便な生活を強いられています。被災から4カ月が過ぎようとする2月上旬、現場を歩きました。

台風19号で役場を含む一帯が冠水した丸森町の中心部

雪がちらつく早朝、JR白石蔵王駅から車で丸森町へ向かいました。山間部を抜けると、国道349号に並ぶかたちで阿武隈川がゆっくりと流れています。

駅から30分ほどで町役場の近くに到着しました。付近には、電気が消えたままの美容室や板で仮補修された家屋があります。道路のコンクリートの表面には今も乾燥した土がこびりついていました。

さらに、町中心部から10分ほど車を走らせると、言葉を失いました。流木に絡まってひしゃげた反射鏡や、流木や家財道具で持ち上げられた状態の車、外壁がはがれて骨組みがむき出しになった家屋もあり、被害の大きさを物語っていました。

町の中心部から少し離れると、土砂や流木のなかに車が埋まっていました。

堤防18カ所決壊、排水も追いつかず。

丸森町は宮城県南部の福島との県境に位置する人口約1万3千人の小さな町です。宅地の多くは町北部にある阿武隈川の支流が流れ、まわりを標高300～500メートルの低い山が囲む盆地にあります。

町は台風接近の情報を受け、10月11日からメールで住民に注意を呼びかけていました。12日午前中には、消防団に出動を要請し、移動式排水ポンプを設置して冠水に備えました。

夕方から雨は強くなり、午後11時台にピークを迎えます。堤防の決壊や浸水が起きたのは日付が変わる頃。阿武隈川の支流3河川の堤防18カ所が決壊したほか、堤防からの越水もありました。

町役場では救助を求める電話が鳴りやみませんでした。「水の流れが速くて危険だったため、助けに行きたくても救助に行けず、情けなかった」。保科郷雄（くにお）町長はこう振り返りました。

12～13日未明にかけて、丸森の観測地点の降水量は400mmを越えました。これは年間降水量の3分の1に相当します。排水ポンプは稼働しましたが、町の冠水を止めることはできませんでした。

このとき、家屋の浸水被害が多かった金山地区の金山まちづくりセンターには、車いすが必要な人を含む住民22人が避難していました。「これまでに経験したことがないような雨が降った。こんなに水が建物の中に上がってくるようなことはなかった」。事務局長の菊地一さん（63）が当時の様子を語りました。

金山まちづくりセンターの事務所の10月13日の様子。
（菊地さん提供）

センターは避難所に指定されており、菊地さんは運営にあたっていました。川の水位が上がっていく様子を知り、「この建物も危ないかもしれない」。そう考え、車いすを抱えて全員で2階に上がりました。階段から1階の様子を見ていると、ドアの隙間から建物の中にどんどん水が入ってきました。後に測ると、94センチの床上浸水を記録しました。13日未明に水は引きましたが、エントランスや事務室の中は泥だらけになりました。

丸森を襲った浸水、土砂、土石流。

丸森町で起きた被害の状況は、大きく分けて三つありました。

山間部では、裏山や通路が崩れ落ちる被害が多く、今もそのままになっていました。

ひとつは金山地区のように、堤防の決壊や越水などにより水が平地の市街地や宅地に流れ込み、じわじわと水位を上げていく浸水被害。

二つ目は山間部の家屋周辺の山の斜面が激しい雨で削り取られ、水とともに土砂が家に流れ込んだりのしかかったりする土砂崩れ。

そして三つ目は支流河川で決壊や氾濫が起き、あふれ出る水の勢いとともに川底の石や岩が流れる土石流被害です。

町の2月初旬時点のまとめでは、家屋被害は全壊111棟、半壊868棟にのぼります。174世帯が仮設住宅に入り、95世帯は「みなし仮設」として、民間の賃貸住宅を借りています。

一方で、1階が浸水しても、仮設などに入らずに2階で暮らし続けている人もいます。町は正確な数字は把握できないとしつつ、「かなりの人数がいる」とみています。いまだに多くの人が被災前の日常に戻っていないのです。

土石流が押し寄せ、決壊した川。いまも石や流木が散乱しており、
近くには1階が壊れた家がありました。

ボランティア、全国から駆けつけ。

被災直後から、数々の被災地を支援してきた団体が現地入りしました。そのひとつ、一般社団法人OPEN JAPANはすぐに避難所での炊き出しや重機を使った土砂の撤去にあたりました。

被災から4日後の10月16日には、丸森町社会福祉協議会（社協）と一緒に災害ボランティアセンターを開設。2月半ばまでの4カ月で、全国から延べ1万6千人超のボランティアが駆けつけ、住民のニーズに応じて断熱材の除去や泥出しなどの作業を手伝いました。

また、日本財団は12月に災害復旧サポートセンターを設置しました。住民が壊れた家屋などを自力で立て直すために丸ノコや発電機といった必要な工具を貸し出す支援を続けています。

ボランティアセンターの担当者によると、最近は家屋の泥出しや床はがしなどの依頼は減ってきたそうです。「床をはる作業や壁の再建といった、業者に依頼が必要な家が増えてきた」と、被災者ニーズの変化があることを説明しました。

一方で、OPEN JAPANスタッフの肥田浩さん(53)は、「『ほかの人が大変だから』と遠慮してきた人から、最近になって土砂の撤去などを依頼されることがある」と言います。多くの支援が入っていますが、まだまだ必要な支援が十分に行き届いていない現状があるようです。

保科町長は「町の復旧は道半ばです。ボランティアや民間の団体と連携しながら、町民が安心して住めるよう、町としてできることをやっていきたい」と話しました。

現地レポート

宮城県丸森町

半数の世帯が被災、金山地区で支援。

2019年10月の台風19号で被災した宮城県丸森町。丸森町中心部から車で15分、金山地区には宅地の一角に白いプレハブが立ち並んでいました。

この地区では約400世帯の約半数が床上浸水などの被害を受けました。被災から4カ月になる2月上旬でも、自宅の2階や仮設住宅で暮らさざるを得ない人たちがいました。被災した人が少しでも快適に過ごせるようにと、さまざまな支援が続いていました。

金山地区にある仮設住宅。

栄養ある食事を炊き出しで提供。

夕方、金山保育園の前で炊き出しがありました。

床上浸水があった多くの家では、台所や風呂場などの水回りが使えなくなりました。台所が使えないため、コンビニやスーパーなどで弁当やカップ麺を買って食べる機会が増えています。

毎週金曜日、金山保育園の前で開かれている炊き出しの様子。

NPO法人姫路発中高生のための東日本災害ボランティア理事長の西本芳浩さん（左）が、住民に食事を渡していました。

NPO法人「亘理（わたり）いちごっこ」とNPO法人「姫路発中高生のための東日本災害ボランティア」は、少しでも温かくて栄養があるものを食べてもらおうと、毎週金曜日、魚や野菜をふんだんに使って炊き出しをしています。

この日のメニューは魚の粕漬け、菜の花としめじのおひたし、牛肉の野菜煮込み。近くに住む加川寿一さん(70)は、この日初めて炊き出しの存在を知りました。被災するまでは自炊する習慣がありましたが、台所に泥が入って使えなくなってしまいました。今はスーパーで買ったカレーやラーメンなど偏った食事が増えました。炊き出しの食事を見て「こういうものが食べたかった。カップ麺とは比べようがない。本当にありがたいです」と喜んでいました。

午後6時までの約1時間で250食を配りました。配膳ボランティアに参加した隣接する山元町の中学3年、今村誠太さん(15)は「自分が人のために何かをするという機会はなかなかない。社会に出たときに生きる経験ができました」と笑顔で話しました。

仮設に棚を取り付けて暮らしを改善。

翌日、19世帯が暮らす金山地区の仮設住宅では、狭い空間でも収納がしやすいように壁に棚をつける作業がありました。

1戸あたりの広さは4.5畳の1DK。決して広いとは言えません。そこで、東日本大震災の後に仮設住宅に5年暮らした経験がある同県七ケ浜町の大工、渡辺功さん(61)と妻洋子さん(61)が、暮らしやすい住まいづくりをしようと、棚作りを企画。はじめに洋子さんが集会所で講演し、仮設住宅で快適に過ごすためのポイントを説明しました。そのあと、住民からの要望を聞き、功さんたちが棚を作っていきました。

住民の要望を聞き取る渡辺功さん。

渡辺洋子さん

功さんは、棚を設置する場所や大きさなどをヒアリング。日本財団災害復旧サポートセンターが用意した丸ノコなどを使って板を裁断しました。木の繊維でけがをしないよう丁寧にやすりをかけ、仮設住宅の壁に釘を使って固定していきました。

木の板を裁断し、やすりをかける功さんら。

幅180センチ、奥行き30センチの棚が付いた佐藤徹さん(68)は「自宅と使い、勝手が違って困ることもありました」と感謝していました。洋子さんは「被災者はたくさんのストレスを感じています。縦の空間を生かすことで少しでも不便な暮らしが改善されればうれしいです」と話していました。

功さんが仮設住宅の壁に棚を固定しました。

現地レポート

宮城県丸森町

宮城県丸森町長に聞く。災害への対応、感じた課題。

台風19号で大きな被害が出た宮城県丸森町の保科郷雄（くにお）町長に2月、被災自治体としての経験や今後の課題を聞きました。

保科郷雄・丸森町長。

――被災からこれまで、町としてどのような対応をしてきましたか。

今回の台風では、想定を大きく超える雨が降ったため町中心部などが浸水し、多くの方が被災しました。発災後は避難所の設置や救援物資の集積、分配はもちろんのこと、被害家屋調査、罹災証明発行、応急仮設住宅の設置などフェーズに応じて、町としてできることをしてきました。昨年末には応急仮設へ入居できる環境が整ったので、避難所は閉所しました。死者10人、行方不明者1人となったことを、非常に残念に思います。

――対応にあたるなかで感じた課題はありましたか。

民間が所有している宅地などが崩落したり、土砂が流入したりした場所も多く、家屋に流入したガレキや流木などが膨大でした。当然、片付ける必要があるのですが、行政が個人の所有する土地や家などといった財産に対し直接介入してよいのかという判断ができなかったため、対応が進められませんでした。

また、職員数が少なくマンパワーが足りないことや、緊急時にどのように動くべきかといった知見がなかったため、町民の被災状況とニーズの把握が進まず、対応が後手にまわりました。

住宅地に流木が放置されたままになっていました。

――これまで多くの災害復旧に関わってきたＮＰＯなどの支援団体が現地入りしました。また、４日後には災害ボランティアセンターが開設し、全国からボランティアの受け入れが始まりました。

被災後、多くのボランティアが町内に入り、宅地内の土砂を出す作業や避難所での炊き出しなどに尽力頂きました。本当に一生懸命やってくださり、大変感謝しています。

災害に関する専門知識が足りず、わからないこともありました。例えば浸水した家の片付けは、水に浸かった場所だけ片付ければ良いと思ってしまいがちです。しかし、実際には壁のなかの断熱材が水を吸い上げているため、浸水した高さ以上の壁をはがさなければならない。

そこで力を発揮してくれたのが、支援団体です。これまで全国の災害現場の復旧に関わってきた支援団体には、ノウハウの蓄積があります。ボランティアが作業しやすいように、必要な作業の判断をしたり、指示を出したりする役割を果たしてくれました。

――行政の立場として支援団体の力が役に立ったと感じたことはありましたか。

それは大いにありました。例えば、被災した人への対応。災害支援にあたるNPOなどが集まってできた団体「震災がつなぐ全国ネットワーク」が作成した「水害にあったときに」という冊子があります。これを、これまで災害支援にあたってきた一般社団法人OPEN　JAPANのスタッフらが避難所で被災者に配り、説明してくれていました。行政が説明するより前に、被災した方々がある程度前提となる知識を持ってくれていた。これによってスムーズに理解して頂けて、大変助かりました。

また、支援団体が、被災者一人ひとりの状況を把握するために、「被災者台帳」の活用も提案してくれました。行政は担当分野ごとに縦割りですが、被災者の状況はさまざまです。被災者の状況を一元的に把握することで、きめ細かなケアができます。これは町としてやらなければならないことですが、ノウハウがなくてできませんでした。このやり方を教えてくれたのが、OPEN JAPANなどの支援団体でした。

――被災から時間が過ぎましたが、課題や必要な支援はありますか。

1階が浸水して使えないため、2階で暮らさざるを得ない方が多くいます。大工や設備業者不足のため、家屋の修繕が進んでいません。

また、自ら声を上げられない被災者にどうやって必要な支援を届けるかも課題です。そのような被災者に支援を届けるには、行政、社会福祉協議会、そして支援団体などが長期的に被災者にアプローチしていくことが必要になります。

行政だけでは手が届かない部分もあるので、今後も支援団体の皆さんと連携しながら、一日も早く被災した住民が元の生活を取り戻せるよう取り組んでいきたいと思います。

崩れた道を補修するボランティア。
（一般社団法人OPEN JAPAN提供）

現地レポート

宮城県丸森町

家の自力再建を豊富な経験で支える

宮城県丸森町は2019年10月の台風19号で被災しました。床上浸水した家屋を住民が自分たちの力で復旧できるように、支える取り組みが続いています。

庭にあった小屋の屋根を解体する作業。

「床下にたまった泥を見たとき、どうすればいいかわからなくて途方に暮れました」

家が被災した芳川登弥子さん(53)は、当時のことを振り返りました。芳川さんは10月に丸森町に転居する予定でした。もともと仙台市で多肉植物と豆盆栽の販売をしており、日当たりが良い場所で植物の栽培をしようと、丸森町への移住を決めたばかりでした。山など日差しを遮るものがなく、客がアクセスしやすい場所を探し、やっと見つけた中古の平屋を契約。台風19号に見舞われたのは引っ越しの直前でした。

被災当時を振り返る芳川登弥子さん。

仙台市にいたため自分自身は無事でしたが、丸森町で借りた家は床上浸水。30センチくらいまで泥水が達した跡が残りました。床の上に泥が残り、床をはがしても泥が出てきました。

11月、町の災害ボランティアセンターに相談しました。週末などに短期で駆けつけるボランティアの派遣はできると言われましたが、自分で作業の指示を出す必要があります。「専門知識がなく、どこから手を付ければよいかがわからないから、指示は出せない。被災して仕事がなく、業者に依頼する資金もありませんでした」。芳川さんは困り果てました。

プロじゃない、でも経験は豊富。

そんなとき、芳川さんの噂を聞きつけた「おてら災害ボランティアセンターテラセン」の坂野文俊代表(57)から声がかかりました。テラセンは、東日本大震災をきっかけに普門寺(宮城県山元町)を拠点に立ち上がった団体です。その後、災害があるたびに、発電機やチェーンソーを車に積んで被災地を支援してきました。

テラセンが大事にしているのは、被災者が主体となって再建を進めること。活動はあくまで支援です。
今回も家屋の骨となる部分の補修や断熱材の除去などの方法を、芳川さんに教えながら一緒に進めました。

特に大変だったのは壁をはがす作業。バールを使って壁を壊すのは骨が折れる作業です。思いもしなかった場所に水を吸った断熱材が入っていることもあり、カビの原因になります。断熱材が入っている場所をくまなく探し、ときには床下に潜ることもありました。

坂野さんは「我々はプロの大工ではありません。でも、多くの被災した家屋を直したり解体してきた経験があります。水につかった部分をただ壊すのではなく、丁寧に取り外すなどしてなるべく使えるものを残し、余計な費用がかからないように工夫しています」と話します。

人の思いが集まった家に。

さらに坂野さんは、ボランティアやテラセンのスタッフ、つながりのある学生など、多くの人が作業にかかわる工夫をしました。坂野さんは「芳川さんは丸森町で仕事をしたくて移住を決めた人。人との触れ合いを通じて、ここに住むことに希望を持ってもらいたかった」と、その理由を話します。

破れた障子に学生ボランティアが貼ったシール。

それは、坂野さんが東日本大震災で被災した時に経験したことでした。多くのボランティアの手で復興した普門寺には、関わった人が今も立ち寄ります。「当時の絆は私にとってかけがえのないものです」。まわりの人の力を借りながら、自分で生活を立て直すことで、被災した人が地域に愛着を持てると坂野さんは考えています。

2月上旬、床上浸水の被害のあった1階の居間には木の板がはられていました。ここにタイルカーペットをはれば、床のできあがりです。タイルカーペットはテラセンがフェイスブックで呼びかけて寄付されたものを使います。

破れた障子には訪れたボランティアたちが小さなシールを貼っていきました。芳川さんはそれを見て「この家はたくさんの人の思いを頂いて再生しました。床も壁も見れば、関わってくれた一人ひとりの顔が思い浮かびます。大切に住みたいです」と喜んでいました。

テラセン代表の坂野文俊さん.

現地レポート

宮城県丸森町

埋もれた神社、NPOと住民が再生。

災害からの復旧・復興で大切なのは個人の住宅だけではなく、地域そのものでもあります。2019年10月の台風19号で被災した宮城県丸森町では、古い神社も被害を受けました。そこで、神社の復旧を支えて、災害に強いまちづくりを目指す取り組みがありました。

被災した神社。鳥居の３分の２以上の高さまで、流木や土砂が埋め尽くしていました。（2019年11月、黄本富士子さん提供）

ガレキが撤去された神社で、NPO法人スマイルシードのスタッフやボランティアらが作業していました。

2月上旬、丸森町の中島天神社に東日本大震災をきっかけに被災地支援を続けてきたNPO法人スマイルシードのスタッフやボランティア約30人が集まりました。

山に近い平地にある中島天神社周辺には、台風で多くの土砂や流木が流れ込みました。神社の建物自体も被災し、参道の大きな杉の木に流木がからんだままになりました。流木や土砂は重機が取り除きましたが、地面の表面を土砂が覆ったため、もとの高さより数十センチ盛り上がった状態になりました。このため、雨が降るたびに側溝付近の土が崩れて、側溝に流れ込んでしまう状態でした。

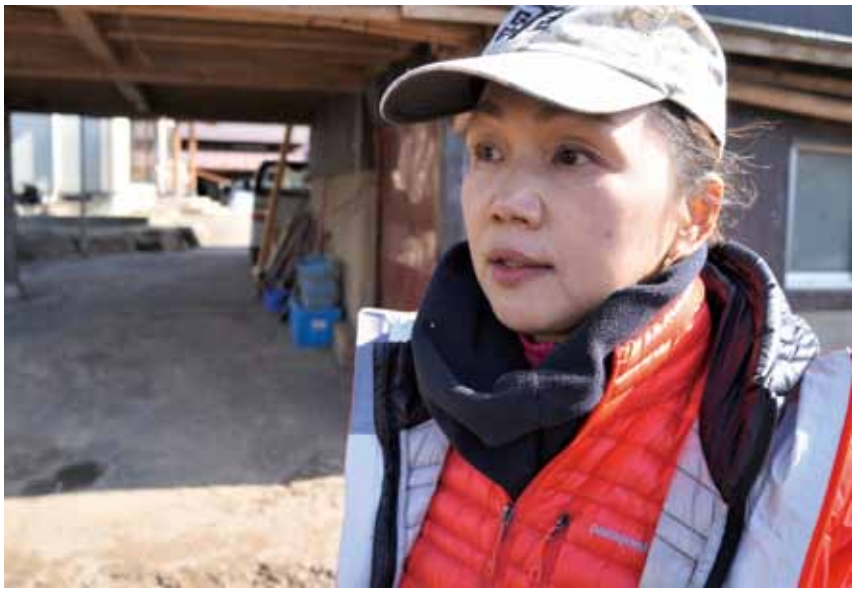
土のう袋に土砂を詰める
スマイルシードのスタッフたち。

そこで、この日は神社脇にある側溝まわりの土を補強する作業が行われていました。NPOスタッフの指示で、ボランティアがてきぱきと土のうを作り、並べていきました

土砂かぶった木、二次災害の危険。

スマイルシード理事長の黄本富士子さん(55)は植樹会に参加するほど木を大切にしてきました。被災後すぐ、丸森町に入って土砂をかぶったままの木を見て、なんとかしたいと思いました。

神社の整備は住宅とちがい、後回しにされがちです。でも、このままガレキに覆われていると、木が根から腐って倒壊などの二次災害が起きる恐れもあります。



スマイルシード理事長の
黄本富士子さん。

「早く土砂を取り除かないと、と思いました。それに木の根は水を吸ってくれます。大量の雨が降ったとしても、水の行き場ができることで地域を守ってくれます。木を守ることが、水害に強い地域づくりにつながります」と黄本さんは話します。

「住民も一緒に」それが条件。

スマイルシードのスタッフが、流木をチェーンソーで切って取り除きました。
（2019年12月、黄本さん提供）

11月中旬、黄本さんは氏子総代の宍戸克美さん(65)に連絡を取りました。神社をなんとかしたいという思いは、宍戸さんも同じでした。ただ、近くに住む氏子も宍戸さん自身も自宅が被災していました。「神社の片付けまでは手が回らない」と考えていたところに黄本から声を掛けられたのです。

ただし、黄本さんは住民が参加することを条件にしました。地域のつながりを深めることが、町の復興につながると考えているからです。11月末から始まった作業では、スマイルシードのスタッフが絡まった流木をチェーンソーで裁断したり、大きな石や丸太を重機で取り除いていきました。そこに住民も多いときは十数人が参加。土砂や流木の撤去を進めました。

神社が復興のシンボルに。

さらにスマイルシードは集会所を会場にランチ会や絵馬作りなどのサロンを開いてきました。子どもやお年寄りが毎回50人以上集まり、交流の場となりました。

スマイルシードスタッフの鈴木寿幸さん。

「土砂を撤去したからといって、町は復興できるわけじゃない」。スタッフで庭園管理士の鈴木寿幸さん(52)は、サロンを開く理由を話します。「被災した人は、生まれ育ったところから寸断され、精神的に不安定になります。だから人との『つながり』が必要です。一緒にご飯を食べ、絵馬を作ることで、会話が生まれ、改めて地域の絆が育まれます」。

取材に訪れた2月上旬、ガレキがなくなった神社では赤い鳥居が太陽の光を受けて目立っていました。神社脇には、地域の人の願いが書かれた絵馬が飾られて、風に揺られていました。宍戸さんは絵馬を見つめながら、「神社が地域の人の集まる場になり、いまや復興のシンボルになりました」と喜んでいました。

神社に飾られた、
地域の人が書いた絵馬。

現地レポート

宮城県丸森町

被災者寄り添い、支援続ける萬ちゃん。

台風19号で被災した宮城県丸森町では、自分が過去に被災した経験を踏まえてボランティアに取り組む人たちに出会いました。東日本大震災の体験を胸に、支援に取り組む萬代（ばんだい）好伸さん(56)もそのひとり。被災地では「萬ちゃん」と呼ばれて多くの人に親しまれ、被災者の心に寄り添うことを身上にしています。

被災した畑で住民と話す萬代好伸さん（右）。

丸森町の山間部、筆甫（ひっぽ）地区。ところどころ雪が残る土の上に、小石や岩が転がっています。台風19号の大雨がもともと畑だった場所に無造作な川をつくり、太陽の光をはね返しています。

「畑の水路に土砂が入って埋もれちまった。そんで畑の真ん中に川ができちまって」。萬代さんは畑の隣に住む男性(87)の話を、「うん、うん」と聞きます。男性の顔をじっと見つめ、ゆっくりと次の言葉を待ちました。「だから、あんたのところで直してほしくて」萬代さんはうなずきました。「今から畑をやって生きがいにして。身体を動かせるようにしねえど」。男性の背中に手を添え、水路の土砂を取り除くことを約束すると、男性はほほえみました。

丸森町で家屋の裏に崩れた土砂を撤去する萬代さん。
（一般社団法人OPEN JAPAN提供）

一人ひとりと何度も顔を合わせて言葉を交わすのが萬代さんの「作法」です。この日の午前中は家の周辺が被災した2世帯を訪ね、雑談も交えながら困りごとがないかを聞きました。

萬代さんは一般社団法人OPEN JAPANの業務委託スタッフで「緊急支援重機担当」を務めています。東日本大震災で被災経験を話す「語り部」としても活動しており、全国に出向いて被災した経験を伝えるほか、災害時は重機を扱ったり、被災者と直接会って地域のニーズを調べる活動をしてきました。

今回の台風19号では、被災から2日後の14日に現地入り。重機を使って家屋や道路など50カ所以上の作業に関わりました。被災地に入り続ける理由を、「ボランティアが被災者を勇気づける姿を見てきたから」と話します。

東日本大震災が転機に

同県石巻市で生まれ育った萬代さん。９年前は紙の原料製造会社に勤めていました。2011年3月11日、市内で車に乗っていたところを津波に遭遇。あと一歩遅かったら水にのまれるところをギリギリで車で逃げました。自身や家族は無事でした。でも、多くの友人、知人を失いました。被災後に勤務先は解雇になりました。

被災した港の復興支援活動の様子。
（2011年8月、石巻市、萬代さん提供）

被災した石巻市には多くのボランティアが訪れました。萬代さんはボランティアを送迎するバスの運転手を務めるようになりました。

6月、被災した港を復興する活動がありました。浮きやロープなどの漁具をガレキの中から探して漁師に届けるのがこの日の活動。大切な家も船も流され、漁師を続けることを諦めている人は少なくありませんでした。

約100人のボランティアが作業にあたり、ガレキの中から見つけた漁具約200個を漁師に届けました。自分の屋号がかかった浮きを手にした漁師たち。「お前らどうしてここまでやってくれるんだ」と口々に言いました。すると、ボランティアのひとりが言いました。「また、ここの牡蠣を食べたいんです」。その言葉に漁師は目を輝かせて「ここでもう一度、牡蠣の養殖をする。2年待ってろ」と応じたのです。

そのやりとりを見た萬代さんは「助け合うことで、人は立ち直ることができる」と感じました。「被災して失ったから諦めるのではなくて、少しの希望が見えることで、もう一度やり直そうと思えるんだ」。そのためにはボランティアによる力が必要不可欠だと感じました。

支援に迷う男性を説得した。

それ以来、災害が起きるたびに被災地に駆けつけるようになりました。元々重機が扱えることから、現場では重宝されました。でも、ボランティアだからといって、すべての被災者が快く受け入れてくれるとは限りません。なかには申し訳ないという思いや、つらい気持ちが整理できずに、支援を拒む人もいます。

西日本豪雨の被災地・愛媛県西予市で
重機を操作する萬代さん。
（2018年10月、萬代さん提供）

2018年にあった西日本豪雨で、被災した愛媛県西予市で出会った高齢の男性も当初は支援を拒みました。

山間部にあった家の裏山が豪雨で崩れ、家と山の間を土砂が埋めていました。当初は「ボランティアが熱中症で倒れたらいけない」と手助けを断り、「自分で片付ける」と言い張っていました。

しかし、男性には病気で入院し、余命宣告を受けている妻がいました。萬代さんは「重機を使って安全に作業するから大丈夫。土砂は俺たちに任せて、少しでもお母さんのそばにいてあげて」と声を掛け、頼ることに迷いがあった男性を説得しました。男性は支援を受け入れることを決めました。

心を閉ざす相手に対して、どう接すれば受け入れてもらえるのか――。萬代さんは常に被災者の心に寄り添い、何を望んでいるのか考えてきました。「何度も変化を繰り返す住民さんの心に寄り添うことが、一番大切です」

丸森町で住民と話す萬代さん（左）。
（2019年11月、OPEN JAPAN提供）

将来の支え手、増やす必要性。

被災地での活動を通じて、萬代さんがいま感じているのは、災害支援のノウハウを受け継ぐ人材の必要性です。ボランティアに来る学生がいても、泥出しなどの作業に終始してしまいがちです。現場で被災者の心に触れ、どんなニーズがあるのか自ら考えることが将来の支え手を増やすことにつながると考えています。今回の台風19号でも、OPEN JAPANをはじめ、現場のニーズに応じて活動してきた支援団体が力を発揮しました。

ボランティア向けの重機講習会で
重機の操作を教える萬代さん。
（2019年6月、OPEN JAPAN提供）

「町の災害復興の過程を知っている人を増やすことが重要です。私たちのようにチームとして支援をしてきた経験を若い世代に受け継いでもらいたい。そして、つらい思いをした人のために何ができるのか、常に考えて行動することが被災者の心のレスキューにつながります」

丸森町の住民と話す萬代さん（左）。（萬代さん提供）

萬代さんはこれからも丸森町での支援を続けます。

現地レポート

福島県

水に浸かった学校、授業や部活動に影響。

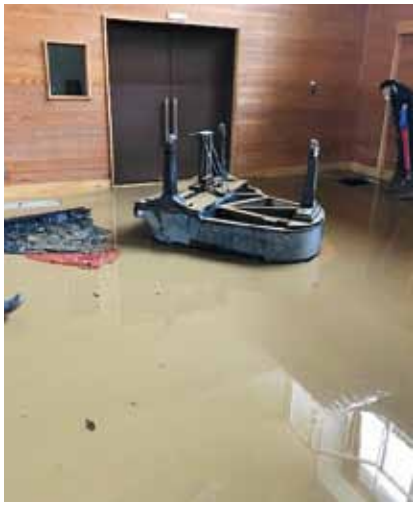
東日本を縦断し、東北地方を中心に広い範囲で記録的な大雨をもたらした台風19号によって、福島県では全国で最も多い32人が亡くなりました。2月には、いわき市の50～90代の男女4人が台風19号では県内初の災害関連死に認定されました。

水に浸かった永盛小周辺の様子。
（10月13日、学校提供）

県内で床上浸水に遭遇した人たちの感想は「じわりと畳が浮いてきた」という人もいれば「あっという間に水に浸かった」という人もいます。台風19号の大雨では、阿武隈川のような大規模な河川だけでなく、中小河川もいたるところで氾濫しました。河川からあふれ出した水が、住宅を飲み込む様子はそれぞれの場所によって異なりました。

いわき市で4人が亡くなった平窪地区に住む山登ユカさんは「電気が切れて静かに水が上がってきた」と話します。山登さんは水に浸かりかけた車から、警報が鳴り響いている様子を覚えています。そこから車で5分ほどの農家、福田國浩さん（92）は「あっという間に水が来た」と言います。福田さん宅は2メートル以上の水に浸かりました。

職員室の床に泥、児童も被災



10月14日の永盛小の体育館内。
ピアノがひっくり返っていました。
（学校提供）

川からあふれた水は学校も襲いました。

被災から4カ月後の2月中旬、郡山駅から車で約15分の郡山市立永盛小学校を取材しました。郡山市では、福島県を南北に流れる阿武隈川とそこに流れ込む支流のところどころで堤防が決壊し、6人が亡くなり、約2万世帯が浸水しました。永盛小は阿武隈川とその支流、笹原川に挟まれた場所にあります。

永盛小は10月13日朝、台風による大雨の影響で校舎や体育館の1階は浸水し、中に入ることができませんでした。水が引いた翌朝、体育館ではグランドピアノがひっくり返り、1階にあった職員室や1年生の教室では、教材やパソコンなどの備品が散乱していました。大知里重政（おおちり・しげまさ）校長(57)は「1階は床に2センチくらい泥が溜まって、私物も含めてほぼ全滅。指導要録などが入った金庫も水浸しですべて廃棄するしかありませんでした」と振り返りました。流れ込んだ水には一部汚水も混じっていました。

水が引いた永盛小の体育館。
（10月14日朝、学校提供）

児童の暮らしも直撃しました。永盛小では全校児童約300人のうち、約半数の児童の自宅が床上浸水。約4分の1は床下浸水でした。全体の7割が浸水被害を受けたことになります。被災から10日後の23日になって、ようやく近隣の4校に分かれて授業を再開しました。2月中旬までに3年生以上は永盛小での学校生活になっていましたが、1、2年生計4クラスの児童はまだ近隣校から戻っていませんでした。

届いた暖房機、進む復旧。

大型暖房機で暖められた体育館で
授業を受ける永盛小の児童。

それでも、復旧は進みつつあります。浸水でいたんだ体育館の床を削る工事は終わり、取材をした日は3年生2クラスが体育の授業をしていました。寒い時期に体育館を暖めるために使われる大型暖房機「ジェットヒーター」も水害で使えなくなってしまいましたが、日本財団の支援で新しいものが届きました。3年生を担任する齋藤友美教諭（29）は「子どもたちが暖かく過ごせます。卒業式も安心して迎えられます」と話します。

ほかにも市内では、郡山駅の北西にある赤木小に、阿武隈川の支流の逢瀬川から水が流れ込み、校内の水位計は約160センチに達しました。堤防沿いにある小泉小では、門扉やフェンスが倒壊しました。これらの学校でも、被災した備品を日本財団が支援しました。

大型暖房機の前に集まった児童。

土が入れ替わったグラウンドで練習する磐城高校ラグビー部。

強豪ラグビー部のグラウンド冠水。

阿武隈川から離れたいわき市も深刻な被害を受けました。市中心部に近い県立磐城（いわき）高校のラグビー部のグラウンドも台風によって使えなくなりました。太平洋に注ぐ好間川から溢れた水が約２メートルの高さまで達したのです。

約１万8000平方メートルのグラウンドに汚水を含む川の水が流れ込みました。雑菌などの危険性を考えて、表面から10センチまで土を入れ替えることになりました。照明用の分電盤も取り換えました。

さらに影響が大きかったのはトイレです。ラグビー部は東北大会の常連の強豪で、男女あわせて約20人の部員がいます。グラウンドにあったトイレが使えなくなったため、歩いて15分かかる学校のトイレを使わざるを得なくなってしまいました。週末の試合となると、保護者らも訪れます。

そこで日本財団の支援で簡易トイレが設置されました。２年生の松崎宙大（ひろと）さん（17）は「トイレが復旧して、今は練習に集中できています」。部員たちは被災した経験をばねに練習に励んでいます。

グランドの隅にある
新しい簡易トイレ。

子どもたちに遊び場を。

被災した子どもたちがストレスを発散する場をつくる活動もあります。NPO法人「子どもが自然と遊ぶ楽校ネット」はいわき市や郡山市の公園で、手作りの遊具を週末を中心に設置しています。外遊びの楽しさを伝え、体を動かす中でコミュニケーションの機会を作り出す狙いがあります。

県営いわき公園では2月中旬、樹木に1本のベルトの上を綱渡りのように歩く「スラックライン」やターザンロープが設置されました。この日は幼児や小学生約70人が遊具を使って遊んでいました。見守り指導にあたっていた遠藤八十八さん(74)は「遊びを通じて元気を提供したい」と話していました。

県営いわき公園で木に張られたロープにつかまり遊ぶ子どもたち。

現地レポート

福島県いわき市

コメ農家を学生ボランティアが支援。

台風被害にあった福島県いわき市の農家は、まだ復旧のただ中にあります。川からあふれ出した水は、田んぼや畑にたくさんのごみや石を運んできました。その撤去作業などに東京や埼玉、新潟などから学生ボランティアが力を注いでいます。２月中旬、大学生たちの作業を取材しました。

ボランティアの注意事項などの説明を受ける大学生たち。

田んぼにまばらにある石や、水路を埋める土。いわき駅から車で10分ほどの、のどかな田園風景がひろがる下平窪地区では、一面に広がる田んぼのいたるところに大小の石が散らばっていました。昨年10月の台風19号によって、近くの夏井川があふれ、上流などから運ばれて来た石が田んぼに残ったのです。

昼の休憩時に学生ボランティアに
被災当時の様子を説明する鈴木さん。（左）

田んぼを一反歩（約300坪）持つ鈴木京子さん（61）は「水が引いた後は鼻をつく臭いが漂い、バイクや灯油缶などが残っていました」と説明します。大きな災害ごみを撤去した後には、砂利のような大小の石が残りました。

この時期は例年、田んぼの土を深く掘り起こし、上層と下層の土を入れ替える田おこしをします。「天地返し」とも呼ばれ、豊かな田んぼにするための重要な作業です。しかし、たくさんの石があると、トラクターの後部に付けた爪はすぐに傷み、作業が続けられません。鈴木さんは「一度稲作を休んでしまうと、再開には長い時間がかかります」と話します。コメの作付けできるかはわからないということでした。

20人が作業、石やごみを除去。

この日、聖学院大（埼玉県）や立正大（東京都）から集まった20人を超える学生ボランティアは、スコップなどを使って、田んぼから石やごみを集めて、土のう袋に詰めこみました。周辺の別の地区でも、農水路に詰まった泥を取り除き、納屋を片付けました。

田んぼの表面に広がった石などを
取り除く学生ボランティア。

廣澤孝駿さん

関西から参加した立命館大３年の廣澤孝駿（たかとし）さん(21)は「ボランティアにニーズがあるのか、テレビなどで報じられても実感ができなかった。でも実際　にやると、多くの人に対してできることがあると実感できました」と話しました。薬学部で薬剤師となって人の役に立ちたいという廣澤さんは、この経験をもとに進路を考えたいそうです。

日本財団学生ボランティアセンター（通称:Gakuvo）は災害が起きると、学生ボランティアを募ります。Gakuvoを運営する宮腰義仁さん（40）は「現状の復旧状態から考えるとまだまだボランティアの継続的な支援が必要です。学生が長期休暇を取れるシーズンには継続的に学生がボランティアとして応募できる機会を作っていきたいです」と話しています。

写真洗浄、被災前の暮らし実感。

Gakuvoでの活動をきっかけに学生ボランティアとして、10月の被災からすでに3度いわき市を訪れた学生もいます。新潟青陵大（新潟県）の立川菜月さん(20)は台風がいわきを襲う様子をテレビで見て、「実際に現地の人と関わって、何か力になりたい」と思い、11月にボランティアに応募したそうです。

アルバムから写真を切り出す
作業をする立川さん。（左）

大学のボランティアセンターを運営する学生スタッフでもある立川さん。学生にボランティアの魅力を伝えるために、実際に体験していて、色んな人たちと出会うことで夢中になりました。現地で活動するうちに、被災地では1、2週間の長期で動ける人材が必要とされていることを知り、大学が休みになって長期の活動ができる時期を待って参加しました。

2月中旬は小名浜地区にある旅館だったという空き家の一室で、写真洗浄の専門家であるピースボート災害支援センターの鈴木省一さん(42)の指導のもと、立川さんら3人のボランティアが水に浸かってしまって汚れた写真を洗浄し、黙々とアルバムから写真を切り出していました。3人が午前中に切り出した写真は、1軒分のアルバム20冊分。思ったより時間がかかりました。

アルバムから写真を切り出す
作業をする3人のボランティア。

写真洗浄はボランティアでやろうとしても長い時間がかかるし、被災者にとってはそれぞれ家族の思い出と向き合う大切な時間をつくります。鈴木さんは被災者向けの講習会を開いて、家族自身の手によって作業することを勧めています。

立川さんは「被害にあった方々には家族がいて、実際に生活していたことを実感できました。ボランティアに参加する人が少しでも増えるように、この経験をほかの大学生にも伝えたいです」。アルバムが山積みの中で、作業は続いていました。

現地レポート

福島県郡山市

障害者の生活再建を家電で支援。

福島県の阿武隈川流域にある郡山市と二本松市、本宮市は台風19号の大雨によって各地で浸水しました。被災者には障害者や家族も含まれています。その生活再建に向けた支援が進んでいます。

福豆荘のダイニングで話す
障害のある女性（真ん中）たち。

「障害者の生活再建はとても難しい」。本宮市や二本松市などで障害者を支援しているNPO法人オハナ・おうえんじゃーの藤本真理事長はそう話します。

藤本さんたちが普段支援している二本松市のダウン症の30代男性は、家の前に架かる唯一の橋が流されました。家に帰ることが困難になり、住み慣れた家での生活ができなくなりました。本宮市に住む発達障害のある男児（５）はアパートが浸水し、住み慣れた環境から離れざるを得なくなったといいます。

真新しい家電製品などが並び、
下宿の居室で笑顔を見せる女性。

浸水被害で家に帰ることができなくなった障害者が環境の変化に慣れることができず、落ち着くことができない様子を藤本さんは目の当たりにしました。プライベートな空間を確保しにくい避難所も生活しにくいため、市に雇用促進住宅などの住居の支援を要請し、住居を確保しました。

郡山市のＮＰＯ法人「しんせい」が支援する障害者も、近くの川の増水によって、被災しました。障害者14人が入居している下宿「福豆荘」では、1階が床上浸水し、入居者の部屋と家財が被害を受けました。

福豆荘に住む女性(43)は「避難所は寒くて眠れなかった」と話します。水が引いた後、四畳半ほどの個室は泥の臭いがして入ることができませんでした。部屋にあった家電製品のほか、衣装ケースに入っていた衣類なども使えなくなりました。洗濯機も壊れ、コインランドリーでわずかな衣類を使い回して過ごしました。女性は布団やテレビ、掃除機の支援を受け、日常を取り戻すことができました。

しんせいの宇田春美理事（58）は「共同生活の部屋に入る家電製品は行政の支援が届きにくいです」と言います。女性は「全部気に入っています。やっと普通の生活になったような気がします」と笑顔を見せました。

現地レポート

福島県いわき市

被災者を元気に、公民館でサロン。

台風19号の被害が大きかった、いわき市平窪地区。そこでは、被災者の相談を受けたり、話を聞いたりするサロンが運営されています。

サロンで運動をする参加者たち。

サロンを始めたのは、近くの学習塾で指導員をする鈴木さおりさん(50)を含めた3人の女性でした。鈴木さんたちが声をかけ合って集まったメンバーで、床上約30センチまで浸水をした公民館を3日間かけて掃除。10月23日にオープンしました。

鈴木さんは「他愛もない話をして笑ったり、愚痴を言ってストレスを発散したり。そんな場になっています」と話します。

おやつを食べながら話をする
ボランティアと被災者たち。

住職も参加、支援の経験生かす。

サロン運営の支援には、近くにある長源禅寺の副住職、栗山周桂さんも参加しています。栗山さんは東日本大震災以来、「支援P（災害ボランティア活動支援プロジェクト会議）」の一員になり、各地の活動に参加してきました。

被災した地域の人たちと話す
栗山さん。（中央）

栗山さんのお寺の檀家（だんか）だった90代の女性は、家族の目前で水に流されて亡くなっています。栗山さんは被災後、災害支援でボランティアセンター運営支援などをする「防災団体 Bousaring」の一員として、いわき市災害ボランティアセンターの運営を助けていました。学生ボランティアに向けては、法話を聞かせる機会を作っています。

ボランティアに来た学生と話をする栗山さん

毎日開催、癒やしの場に。

２月中旬の昼下がり、おやつと飲み物を楽しみながら交流できるサロンの運営を、栗山さんが手伝っていました。そこにはお年寄りや子ども連れのお母さんなど、さまざまな人が顔を出していました。

サロンに来た人たちからは「床上浸水した自宅で水を含んだ床や柱はどうしたらいいか」「壁の断熱材などにカビは発生しないか」といった質問が挙がったそうです。男の子を連れてサロンを訪れた山登ユカさんは「最初は相談するために来ていた。似た境遇の人が集まっているので癒やされて、いつの間にか、学校帰りに来るのが当たり前になっています」と言います。

サロンに参加している子どもたち。

当初週３日だったサロンの開催は、一般社団法人「Teco（てこ）」が引き継ぎ、今では毎日開かれています。鈴木さんは「いい空間になりました。サロンに来られる人はいいですが、家に閉じこもっている人をどうやって見つけて、（地域社会と）つながっていけるかが課題です」と話しています。

現地レポート

栃木県

豪雨で車水没、カーシェアで足を確保。

台風19号による記録的豪雨に伴い、栃木県内では栃木市の永野川や鹿沼市の思川など県が管理する13河川の堤防26カ所が決壊しました。14市町に大雨特別警報が出され、総務省消防庁のまとめでは、鹿沼市などで計４人が亡くなりました。

台風19号による記録的豪雨に伴い、栃木県内では栃木市の永野川や鹿沼市の思川など県が管理する13河川の堤防26カ所が決壊しました。14市町に大雨特別警報が出され、総務省消防庁のまとめでは、鹿沼市などで計４人が亡くなりました。

鹿沼市上粕尾地区で土砂崩れが起きた現場では、
道路が寸断されていました。（機動パトロール隊提供）

鹿沼市内では裏山が崩れ、家屋に土砂が流れ込みました。
（機動パトロール隊提供）

台風19号による記録的豪雨に伴い、栃木県内では栃木市の永野川や鹿沼市の思川など県が管理する13河川の堤防26カ所が決壊しました。14市町に大雨特別警報が出され、総務省消防庁のまとめでは、鹿沼市などで計４人が亡くなりました。

鹿沼市を中心に被災家屋の畳や床をはがしたり、土砂を撤去したりするボランティアに取り組む「機動パトロール隊」の茂木和樹代表（24）は「鹿沼市は６年前も水害に見舞われました。前回は被害の中心が市街地でしたが、今回はその範囲が山間部まで広がりました」と説明します。

２月の時点では、家屋に流れ込んだ土砂はほぼ片付いたそうです。ただ、重機を使って側溝や用水路から土砂を取り除く応急的な復旧作業は続いています。

被災者に無料で貸し出し。

台風19号では、多くの車が水没し、生活の足を失った被災者が相次ぎました。車の買い取り会社は10万台が水害に遭ったと見積もっています。特に生活に車が欠かせない地域では大きな問題となりました。

宮城県石巻市での被災の様子。
（2019年10月13日、
日本カーシェアリング協会提供）

そこで、一般社団法人日本カーシェアリング協会（宮城県石巻市）は代わりの「足」を届ける活動に取り組んでいます。使わなくなった車の寄贈を受けて、それを被災者らに無料で貸し出すシステムです。

12月、栃木市では市の施設の一角に窓口を開設しました。県内全域の被災者に対して、乗用車は1カ月、軽トラックは無料で1日単位の貸し出しができる態勢を整えました。今年1月15日までの集計では、栃木や宮城などで152件の貸し出しがありました。

石巻市内の
日本カーシェアリング協会事務所。
（2019年10月13日、協会提供）

協会の西條里美さんは「台風の影響で、石巻の協会事務所も被災しましたが、何とか立て直し、貸し出しができるようになりました」と振り返ります。愛車として長年使っていた車を寄贈する人もおり、「その気持ちを大事にしたい」と話します。

「災害が起きた後、迅速に自治体と連携して拠点を作り、運営するスタッフを確保するには課題もありますが、感謝の手紙が届くと支援が届いていることが実感できます」と西條さん。「通勤や買い物で困っていたところ、借りることができて助かった」「車がないと病院にも行けませんでした、感謝します」などのメッセージが被災者から届くこともあり、やりがいを感じています。今後も協会では活動を続けていきます。

現地レポート

茨城県

被災者の心身、鍼灸師のマッサージでケア。

「令和元年東日本台風」と命名された台風19号は、茨城県にも甚大な被害をもたらしました。県内では死者2人を出し、家屋損壊は2019年12月時点で全壊や半壊、一部損壊を含めると4000棟以上に及びました。

台風19号が接近した2019年10月12日、気象庁は午後7時50分に大雨特別警報を発令しました。大雨に見舞われた茨城県では一時は2万戸以上が断水し、多くの避難者が出ました。多くのボランティアが駆けつけ、大雨で浸水した家屋の清掃などを手伝いました。

水戸市の体育館内で被災者に
マッサージを施す茨城県鍼灸師会の会員。
（いずれも同会提供）

マッサージのボランティアは
茨城県大子町の温泉施設でも施された。

そうした被災者やボランティアの疲れを癒やそうと、茨城県鍼灸師会は被災直後の10月末から11月初旬にかけて、鍼や灸、マッサージを計6日間、延べ200人以上に施しました。

県鍼灸師会の大高達雄会長は「被災した住宅の片付けでは、普段は動かさない重い家具などを運ぶ作業もあり、腰や肩の痛みを訴える人たちにとても喜ばれました」と話します。

県鍼灸師会のマッサージは被災者の体のケア以外の効果も生みました。大高さんは「マッサージをしている間は被災者の話を聞く時間でもありました。被災した苦しさは、身近な人には言えないけれど、私たちのような外から来た人には言いやすいのかもしれません。話を聞くことが心のケアにもなったと思います」と振り返りました。

大高さん自身が営む鍼灸院には被害がありませんでした。一方、知人が勤める整骨院は床上浸水し、開業できない時期が続きました。身近な人が被災したことや、普段使う道路が冠水した様子を見て、「これまでは他人事だった災害が一気に身近に感じられました」。そして、こう意気込みます。「被災者の方に喜んでもらえることは何かを考え、勉強して、またボランティアに臨みたいです」

資料　支出明細

団体の法人格の略称
一財：一般財団法人　福：社会福祉法人
一社：一般社団法人　特：特定非営利活動法人
公社：公益社団法人　学：学校法人

教育環境整備

42件　38,870,000円

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
1	学	あかい幼稚園（小川幼稚園）	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
2	学	あかい幼稚園（あかい幼稚園）	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
3	学	さかえ学園　さかえ幼稚園	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
4		宮城県伊具郡丸森町立　金山小学校	宮城県伊具郡	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
5		福島県立　磐城高等学校	福島県いわき市	830,000	災害復興支援特別基金（交付金）
6		保育所型認定こども園　丸森たんぽぽこども園	宮城県伊具郡	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
7		郡山市立　永盛小学校	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
8		社会福祉法人さくらんぼ会　好間保育所	福島県いわき市	420,000	災害復興支援特別基金（交付金）
9		学校法人　みどり幼稚園	福島県相馬市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
10		社会福祉法人報徳会　中村報徳保育園	福島県相馬市	860,000	災害復興支援特別基金（交付金）
11		須賀川市立　第一保育所	福島県須賀川市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
12		学校法人篠ノ井学園　長野俊英高等学校	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
13		郡山市立　赤木小学校	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
14		宮城県　柴田農林高等学校	宮城県柴田市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
15		福島県立好間高等学校	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
16		郡山市立　小泉小学校	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
17		栃木市立　大平西小学校	栃木県栃木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
18		栃木市立　栃木西中学校	栃木県栃木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
19		栃木市立　栃木第五小学校	栃木県栃木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
20		伊達市　梁川認定こども園	福島県伊達市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
21		本宮市立　第一保育所	福島県本宮市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
22		社会福祉法人五幸会　豊野みなみ保育園	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
23		長野市立　長沼小学校	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
24		長野市立　松代中学校	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
25		長野市立　東北中学校	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
26		長野市立　豊野中学校	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
27		社会福祉法人　康和会　勝田すみれ保育園	茨城県ひたちなか市	650,000	災害復興支援特別基金（交付金）
28		幼保連係型　認定こども園さくら	栃木県栃木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
29		学校法人双葉学園　絹ふたば文化幼稚園	茨城県つくばみらい市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
30		社会福祉法人了寿会　梁川中央保育園	福島県伊達市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
31		うずま保育園	栃木県栃木市	110,000	災害復興支援特別基金（交付金）
32		学校法人尚志学園 尚志幼稚園	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
33		幼保連係型　認定こども園門前保育園	岩手県久慈市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
34		社会福祉法人修敬会　三田保育園	東京都青梅市	500,000	災害復興支援特別基金（交付金）
35		千曲市杭瀬下保育園	長野県千曲市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
36		千曲市雨宮保育園	長野県千曲市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
37		那須烏山市　適応指導教室　レインボーハウス	栃木市那須烏山市	500,000	災害復興支援特別基金（交付金）
38		福島県立いわき総合高等学校	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
39		上野村立　上野小学校	群馬県多野郡	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
40		九品寺附属　平窪幼稚園	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
41		くほんじ　ひらくぼ保育園	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）
42		社会福祉法人春日会　保育所型認定こども園 はと保育園	福島県いわき市	1,000,000	災害復興支援特別基金（交付金）

学生ボランティア支援

10件　4,130,000円

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
1		東日本国際大学	福島県いわき市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
2		長野市立長野中学校・長野高等学校	長野県長野市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
3		長野県赤穂高等学校	長野県駒ケ根市	300,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
4		仙台リゾート&スポーツ専門学校	宮城県仙台市	510,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
5		仙台医療秘書福祉専門学校	宮城県仙台市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
6		飯田女子高等学校	長野県飯田市	180,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
7	学	三幸学園　仙台こども専門学校	宮城県仙台市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
8	学	三幸学園　仙台スイーツ&カフェ専門学校	宮城県仙台市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
9		長野県上田染谷丘高等学校	長野県上田市	320,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
10		長野県上田東高等学校	長野県上田市	320,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

NPO支援 -1

161件　162,662,100円

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
1		震災がつなぐ全国ネットワーク	愛知県名古屋市	4,960,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
2	一社	OPEN JAPAN	宮城県石巻市	4,800,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
3	一社	日本カーシェアリング協会	宮城県石巻市	4,660,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
4		災害NGO結	沖縄県糸満市	3,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
5		ユー・アイ・アソシエーション	兵庫県西宮市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
6	特	絆JAPAN	長野県諏訪市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
7		三田を知る会	兵庫県三田市	660,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
8	特	パワーアップ支援室	岩手県北上市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
9	公社	日本鍼灸師会	東京都豊島区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
10	一社	やまと災害ボランティアネットワーク	神奈川県大和市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
11	公社	全日本鍼灸マッサージ師会	兵庫県姫路市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
12	一社	NGO　Life Investigation Agency	長野県千曲市	862,100	災害復興支援特別基金（寄付金）
14	特	ふくい災害ボランティアネット	福井県坂井市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
15	一社	ワカツク	宮城県仙台市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
16	一社	Bridge for Fukushima	福島県福島市	840,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
17		NPO法人チャルカ・ジャパン	福岡県太宰府市	600,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
18	特	亘理いちごっこ	宮城県亘理郡亘理町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
19		PVO(Private voluntary organization)「KISSIN'HEART東北」	埼玉県さいたま市	870,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
20	特	しんせい	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
21		SVTS風組	新潟県小千谷市	770,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
22		おてら災害ボランティアセンター　テラセン	宮城県亘理郡山元町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
23	一社	LOVE FOR NIPPON	東京都渋谷区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
24		チームかぬま	栃木県鹿沼市	400,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
25	一社	長野県針灸師会	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
26	特	Vネット	岐阜県高山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
27	特	姫路発　中高生のための東日本災害ボランティア	兵庫県姫路市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
28	特	侍学園　スクオーラ・今人	長野県上田市	440,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
29	特	有明支縁会	長崎県諫早市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
30		機動パトロール隊	栃木県鹿沼市	890,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
31		Heart.Clean.S.C	埼玉県さいたま市	500,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
32		天理教災害救援ひのきしん隊　埼玉教区隊	埼玉県さいたま市	600,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
33		災害支援信濃町連絡会	長野県上水内郡信濃町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
34	特	ユナイテッド・アース	兵庫県神戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
35		nigiwai	千葉県富津市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
36	一社	災害復興支援協議会　ダッシュ隊大阪	大阪府吹田市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
37		コミサポひろしま	広島県呉市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
38		縁の下のもぐら	兵庫県芦屋市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
39	特	災害看護支援機構	兵庫県神戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
40		台風19号被災地を支援する長野大学有志の会	長野県上田市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
41		災害鍼灸マッサージプロジェクト	東京都調布市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
42		舞鶴災害ボランティアセンター	京都府舞鶴市	650,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
43	公社	青年海外協力協会	長野県駒ヶ根市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
44	公社	青年海外協力協会	長野県駒ヶ根市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
45	福	福音会	福島県須賀川市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
46	一社	REVIVEJAPAN	山梨県韮崎市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
47	特	ぴぃかぁぷぅ	福島県郡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
48	特	オハナ・おうえんじゃー	福島県本宮市	970,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
49		チームすぎさん	愛知県新城市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
50		あらいぐま岡山	岡山県岡山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
51	一社	福島県聴覚障害者協会	福島県福島市	940,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
52		災害ボランティア愛・知・人	愛知県春日井市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
53		DRT-JAPAN広島	広島県福山市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
54	福	長野県聴覚障害者協会	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
55	福	千葉県聴覚障害者協会	千葉県千葉市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
56	特	薔薇香る癒しのまち岩見沢	北海道岩見沢市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
57		なごや防災ボラネット	愛知県名古屋市	650,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
58	一社	YOMOYAMA COMPANY	宮城県伊具郡丸森町	800,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
59		NPO法人リエラ	大分県日田市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
60		北信濃農業復興プロジェクト	長野県長野市	730,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
61	一社	日本レスキューボランティアセンター	東京都渋谷区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
62	一社	スタンドアップ亘理	宮城県亘理郡亘理町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
63		NPO法人　佐久平総合リハビリセンター	長野県佐久市	960,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
64	一社	ロハス南阿蘇たすけあい	熊本県阿蘇郡南阿蘇村	630,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

NPO支援-2

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
65		わんらぶ	千葉県館山市	660,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
66		穂保被災者支援チーム	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
67	特	日本ホスピス・在宅ケア研究会	兵庫県神戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
68		たてもの修復支援ネットワーク	新潟県新潟市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
69	特	長野県NPOセンター	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
70	一社	日本災害看護学会	東京都豊島区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
71		長野アップルライン復興プロジェクト	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
72	一財	全日本ろうあ連盟	東京都新宿区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
73		天理教埼玉教区青年会	埼玉県さいたま市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
74	一社	復興支援士業ネットワーク	宮城県仙台市	220,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
75		災害ボランティア　Relight	千葉県木更津市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
76	特	メックス	埼玉県吉川市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
77		子どもが自然と遊ぶ楽校ネット	福島県会津若松市	900,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
78		神戸大学学生震災救援隊	兵庫県神戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
79		任意団体　bousaring	東京都世田谷区	280,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
80		佐野駅南ボランティアセンター	栃木県佐野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
81		TEAM　SHIRO	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
82		ながの災害・防災ネットワークみらい	長野県長野市	740,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
83		NPO法人防災・災害ボランティア　かわせみ	東京都八王子市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
84	特	南房総リパブリック	千葉県南房総市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
85	特	スマイルシード	宮城県仙台市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
86	特	NPOホットライン信州	長野県松本市	980,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
87		支援の「わ」	滋賀県長浜市	950,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
88		石狩思いやりの心届け隊	北海道石狩市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
89		災害NPO旅商人	埼玉県さいたま市	570,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
90		DRT－JAPAN三重	三重県志摩市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
91		風組関東	東京都中野区	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
92	特	チームレスキュー	愛知県瀬戸市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
93		日本笑顔プロジェクト	長野県上高井郡小布施町	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
94	一財	日本財団ボランティアサポートセンター	東京都港区	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
95	特	コミュニティサポートスクエア	岐阜県岐阜市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
96	一社	日本カーシェアリング協会	宮城県石巻市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
97	特	災害救援レスキューアシスト	大阪府茨木市	3,210,000	ななに一基金（寄付金）
98	特	MAKE HAPPY	兵庫県神戸市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
99		ハンズボラ	栃木県佐野市	600,000	ななに一基金（寄付金）
100	福	倉敷市社会福祉協議会	岡山県倉敷市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
101	特	ホップ障害者地域生活支援センター	北海道札幌市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
102	公社	宮城県鍼灸師会	宮城県仙台市	500,000	ななに一基金（寄付金）
103		ヒューマンシールド神戸	長野県上水内郡信濃町	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
104	特	アイキャン	愛知県名古屋市	1,000,000	ななに一基金（寄付金）
105	一社	DPLS JAPAN	東京都中央区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
106	一社	DPLS JAPAN	東京都中央区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
107	特	東日本ネットワーク手にぎり隊	東京都町田市	810,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
108		たすけあいネットしまとみ	大阪府大阪市	620,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
109	特	ディープデモクラシー・センター	千葉県松戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
110	特	未来に向かって助け合い	栃木県宇都宮市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
111		静岡大学学生防災ネットワーク	静岡県静岡市	520,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
112		3.11石巻支援　チームエース	東京都練馬区	740,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
113		被災地を写真でつなぐ実行委員会	福岡県北九州市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
114		災害支援団体　Revive	神奈川県川崎市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
115	一社	マザー・ウイング	宮城県仙台市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
116		長野県ブラッシュボランティア	長野県上高井郡小布施町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
117		JAPAN HOPE	熊本県熊本市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
118		みらい見守り隊	東京都葛飾区	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
119		めぐる食堂	長野県上水内郡信濃町	860,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
120		スタンドアップ・ル実行委員会	長野県長野市	640,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
121		ちゃかぽか松代	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
122		TEAM　愛と感謝	大阪府茨木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
123		日本笑顔プロジェクト	長野県上高井郡小布施町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
124		災害支援団体　かわず	熊本県阿蘇郡西原村	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
125		丸森屋台プロジェクト	宮城県伊具郡丸森町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
126	一社	四つ葉	宮城県大崎市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
127		N-FiRST　長野災害救助支援隊	長野県中野市	820,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
128		金沢大学ボランティアさぽーとステーション	石川県金沢市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

NPO支援-3

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
129		Tree　Tree　Tree　丸森	宮城県伊具郡丸森町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
130	特	冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク	宮城県仙台市	860,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
131	特	栃木おやこ劇場	栃木県栃木市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
132		復興支援団体プラスネオ	宮城県東松島市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
133	特	絆JAPAN	長野県諏訪市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
134		ALL救衆DISASTER　RELIEF　CREW	福岡県朝倉市	820,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
135	特	スマイルシード	宮城県仙台市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
136		松本市炊き出し隊　みらい	長野県松本市	860,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
137		HARE	長野県須坂市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
138		チームすぎさん	愛知県新城市	870,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
139		おぶせエバーグリーン	長野県上高井郡小布施町	190,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
140		長沼復幸会	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
141		縁の下のもぐら	兵庫県芦屋市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
142	特	ウッディ阿賀の会	新潟県新潟市	850,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
143		長野ブラッシュボランティア	長野県上高井郡小布施町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
144	特	銀座ミツバチプロジェクト	東京都中央区	600,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
145		HOPE　APPLE（穂保被災者支援チーム）	長野県長野市	840,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
146		津野復光隊	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
147	特	ディープデモクラシー・センター	千葉県松戸市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
148		ボランティア団体神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti	兵庫県神戸市	520,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
149		ユナイテッドかながわ	神奈川県大和市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
150		NGOヒューマンシールド神戸	長野県上水内郡信濃町	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
151		たてもの修復支援ネットワーク	新潟県新潟市	970,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
152		災害支援団体　Revive	神奈川県川崎市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
153	特	アイキャン	愛知県名古屋市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
154		NPO法人防災・災害ボランティア　かわせみ	東京都八王子市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
155		被災写真救済ネットワーク	岩手県陸前高田市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
156		炊き出し救援チーム　Hundredhands	長野県長野市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
157		めぐる食堂	長野県上水内郡信濃町	580,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
158		六地蔵町神楽獅子保存会	長野県長野市	950,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
159		復興支援団体プラスネオ	宮城県東松島市	950,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
160	一社	四つ葉	宮城県大崎市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
161	一社	マザー・ウイング	宮城県仙台市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
162		みえ災害ボランティア支援センター	三重県津市	1,000,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

ボラバス

19件　7,830,419円

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
1	福	高石市社会福祉協議会	大阪府高石市	1,470,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
2	福	安曇野市社会福祉協議会	長野県安曇野市	290,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
3	福	村上市社会福祉協議会	新潟県村上市	150,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
4	福	河南ブロック社会福祉協議会連絡会	大阪府千早赤阪村	166,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
5	福	豊丘村社会福祉協議会	長野県豊丘村	49,500	災害復興支援特別基金（寄付金）
6	福	春日部市社会福祉協議会	埼玉県春日部市	75,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
7	福	阿南町社会福祉協議会	長野県下阿南町	40,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
8	福	島根社会福祉協議会	島根県松江市	1,820,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
9	福	中央市社会福祉協議会	山梨県中央市	100,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
10	福	飯田市社会福祉協議会	長野県飯田市	80,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
11	福	広島県社会福祉協議会	広島県広島市	1,510,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
12	福	岐阜県社会福祉協議会	岐阜県岐阜市	279,181	災害復興支援特別基金（寄付金）
13	福	岡山市社会福祉協議会	岡山県岡山市	930,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
14	福	上田市社会福祉協議会	長野県上田市	286,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
15	福	土浦市社会福祉協議会	茨城県土浦市	95,130	災害復興支援特別基金（寄付金）
16	福	昭和町社会福祉協議会	山梨県昭和町	50,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
17	福	大船渡市社会福祉協議会	岩手県大船渡市	123,904	災害復興支援特別基金（寄付金）
18	福	一関市社会福祉協議会	岩手県一関市	35,704	災害復興支援特別基金（寄付金）
19	福	東浦町社会福祉協議会	愛知県東浦町	280,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

DIY センター

5 件　19,260,000 円

No.	法人格	団体名	団体の所在地	支援金額	寄付金の種類
1	特	茨城NPOセンター・コモンズ	茨城県常総市	2,800,000	ななに一基金（寄付金）
2	特	とちぎボランティアネットワーク	栃木県宇都宮市	4,940,000	ななに一基金（寄付金）
3	特	ハイジ	栃木県栃木市	4,850,000	ななに一基金（寄付金）
4	一社	OPEN JAPAN	宮城県石巻市	4,950,000	ななに一基金（寄付金）
5		風組関東	東京都中野区	1,720,000	ななに一基金（寄付金）

弔慰金

57 件　5,700,000 円

日本財団学生ボランティアセンター

2件　9,840,000 円

1	令和元年豪雨・台風災害に係る支援事業（フェーズ１）	4,850,000	災害復興支援特別基金（寄付金）
2	令和元年豪雨・台風災害に係る支援事業（フェーズ２）	4,990,000	災害復興支援特別基金（寄付金）

2020年5月
日本財団経営企画広報部　部長　福田英夫
災害対策チーム アドバイザー 黒澤司
災害対策チーム 真野 優

制作・編集：日本財団
制作協力・デザイン：有限会社 goodesign
取材協力：サムライト株式会社 文・写真：奥令、金子元希、高橋克典、田中誠士

日本財団
THE NIPPON FOUNDATION
For Social Innovation

日本財団
〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2
Tel:03-6229-5111　Fax:03-6229-5110
E-mail:cc@ps.nippon-foundation.or.jp